

提督として着任したはずなんだが？

七海 碧月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一度この世を去り、艦隊これくしょんの世界で提督となった如月七海

彼には本来あるはずのない艦装の適性が合った・・・

彼は暫く提督業に勤しんでいたが、とある海域での出来事で何故か艦娘の体になっていて!?

七海「全てじゃなくても、せめて目の前の子達は救いたい!!」

この作品は処女作です

又、更新も亀更新です

誤字脱字指摘、意見、感想等を宜しくお願い致します

# 目次

## 第一章 く提督業く

第一話	旅立ち？	1
第二話	鎮守府へ	6
第三話	出撃、提督さんは大忙し (by妖精さん)	11
第四話	さあ！素敵なパーティしましょ！ (by夕立)	15
第五話	提督の戦い く艦装編く	20
第六話	提督の戦い く仮面ライダー編く	25
第七話	ウエーク島攻略作戦！	30
第八話	提督が眠りにについている時	35
第九話	ただいま (七海？)	40
第十話	不幸だ (by元提督)	45
第十一話	大本営ってこんなに腐ってたっけ？ (by七海)	50
第十二話	アインクラッド流剣技？なにそれ (by七海)	55
第十三話	そんな思考で大丈夫か？ (by如月)	61
第二章 発動！B提督及び、B鎮守府討伐作戦！		
第十四話	余裕の音だ、切れ味が違いますよ。 (by妖精さん)	66
第十五話	止める (by帰月)	71
第十六話	これは、ゲームではないし遊びでもない (by帰月)	76
第十七話	そうだ、引越せししよう (by帰月)	81
第十八話	その装備は大丈夫か？ (by帰月)	85

第十九話 艦隊冬の大建造祭り！

# 第一章　く提督業く

## 第一話　旅立ち？

学校の帰り際

?? 「はあ…」

ため息をつく俺

??? 「何ため息ついてんだよ？　運が逃げるぞく」

?? 「うっせ!!　今俺はなあ、落ち込んでるんだよ!!」

??? 「え？　どうせ自分の運の無さにだろww」

?? 「ぐっ…」

言い返せない俺、実は今俺がハマっているゲーム、通称「艦これ」で  
目当ての艦が出ないのだ

??? 「そこはしようがねえだろうよ、七海」

七海 「まあ…　そうだけどさあ…」

俺は如月　七海　良く女の子に間違えられるが、男だ

まあ、ポニーテールの髪や小さめの身長、更には可愛い女の子の  
風の顔つきは完全に女の子のそれであるが…

大体両親も何で男に七海と付けたのかいまだに分からんのである

??? 「にしても…　完全に女の子だな、お前。　告白されたの何回  
だっけか？」

七海 「うるせえ、荻野…　男女会わせて十回超えてから覚えて  
ねえよ…」

荻野 「ハツハ！　モテモテだな、お前　羨ましいなく」

七海 「止めろ…　嬉しく無い…　完全に他人事だな…　お前」

荻野 「他人事ですから」

七海 「はあく」

そう、俺はこう言っただけだが、モテる

ただ！　嫌なのはその性別である

考えてほしい、女の子からの告白ならまだいい、しかし男子しかも、  
先輩からとなると完全に気まづくなる上に、こっちも毎回断らなくて

はいけないので正直に言っただけ困るのだ

あ、因みに今俺と話をしているのは荻野 祐人

本来なら祐人と呼ぶのだがこいつだけは別だ

荻野「あ、俺の紹介ありがとなく七海」

七海「地の文を読むんじや無いよ」ベシッ

荻野「いつて！ 何すんだよ」

七海「お前が悪いと思うぞ？」

こういうマイペースな奴なのだ

荻野「で？何でため息ついてたんだよ？ 艦これで何かあ不幸な事

でもあったか??」

七海「まあ… 俺の欲しい艦が出なくてなく」

荻野「馬鹿いえ、俺なんか大型建造回しまくってようやく！大鳳出たんだぞ!?! 数回で諦めんよ」

七海「数回やってダメだったんだよ、察せよまな板スキー」

荻野「うるさい、睦月型スキー提督」

こいつは、大鳳等のまな板が好きなのだ

まあ、俺も駆逐艦の睦月型が好きなので言い返せないのだが…

よくよく考えると、まな板呼ばわりは大鳳等に失礼だと思う

キーンコーンカーンコーン

荻野「あ、ヤベ時間だ… じゃあな、七海！また明日」

七海「おう、またな」

そして俺達は別々の道へと帰っていった

この時はまだこんな日常が続くと思っていた

そう、その時まで

七海「あつ… 買い物しなくちゃ 食べるもの無いや…」

そう言っただけでスーパーに来た俺、買い物しながら今日は何を作ろうかと考えているとき

「ねえ、聞いた？この頃この辺で通り魔が合ったらしいよ？」

「え、怖いね」

七海（へー、そんなことが合ったのか）

まあ、大丈夫だ、そんなに俺の運は悪くないはずだ！、と思い買い

物を終えて家に帰る途中だった

七海「〜♪」

とご機嫌で家に帰っている時だった

「キヤー!!通り魔よ!!」

七海「なっ!」

さっきの話で聞いた通り魔が出たのだ

七海「マジかよ、どんだけ今日は運が悪いんだよ!」

悪態を付いていると前から血だらけの男が走ってきた

「どけ!」

七海（うわ、こっち来たよ）

悲鳴をあげ回りの人が居なくなっていく

その時、

「おい!そこに止まれ!!」

「チツ、警察かよ!」

「警察官が二、三名走ってくる

七海（はあ、やつと来たよ）

実は七海は最初の悲鳴の時、警察に通報していたのだった

七海（よし、逃げよう!）

しかし、その時買物後で荷物があつたのが原因かもしれない

又は、路面がデコボコしてつまずき易かったのがあるのかもしれない

い

いや、もしかすると両方あるいは、それ以外かもしれない

何にせよ、彼には不幸が襲いかかった

七海「なっ!」

足を引つ掻けて転んでしまったのだ

勿論、通り魔がそんな狙いやすい獲物を狙わない訳がない

「オラア、死ねえ!!」

七海（まず! ツ!）

呆気ないものだった

ズブツとした感触、音そして

七海（あ、血が出てる!）

「か、確保お！」

「やめろ！はなせえ!!」

七海（ああ、あいつは捕まったか 良かった…  
まあ、呆気ないな…）

これが死ぬって事なのか？

七海（まあ、後悔はあるか

またあんな風に笑って居たかったな…）

あ、走馬灯も見えてきた）

「おい！ しつかりしろ！」

救急車、救急車を呼べ!!」

七海（はは、何か言ってるな

でも、もう分かんないや

だんだんと、ねむく、、なつて、、きたな）

その日、ある場所で一人の男の子が死んだ

七海（んあ？何だよ、此処

真っ暗でしかもせめえな）

彼が感じたのはそんなことだった

七海（お、？何か引き出されるようなかんじが!?!）

突然、目の前が明るくなった

んぎゃーああ!!!

七海（え？赤ちゃんの泣き声??）

「おめでとうございます！ 元気な男の子が産まれましたよ!!」  
は？

七海（いやいや、そんなことは無いはずだろ

だって俺は死んだはず…）

七海（いや、これは転生と言うやつかな？

また面倒だな、最初からやり直しとか…）

「この子は七海、如月七海と名付けましょう」

七海（あ、名前変わらないんですね



まあ良いや、また生まれることが出来たんだ此処でのんびりできた  
らしいなあ)

彼はそんなことを思っていた

此処が彼の元々居た世界では無いこと

そして、この世界は彼の大好きな艦これの世界であることを、彼は  
まだ知らない……

## 第二話 鎮守府へ

「??サイド」

?? 「ふう… ここが私の着任する鎮守府かあ…」

とある日の朝 一人の少女が鎮守府の門の前に立っていた

?? 「よし… まだ提督さんは居ないみたいですし整理とか、色々見て回りますか」

「移動中」

?? 「わあ… ここが出撃する所かあ」

あ、私の艀装もちゃんとある」

出撃ドックへ来た少女

そこへ…

?? 「あ、吹雪ちゃんじゃないの！」

吹雪 「あ、初めまして！明石さん」

明石 「ええ、初めまして」

吹雪 「明石さんもここへ？」

明石 「うん、建造や、酒保とかの役割をするけどね」

吹雪 「へー、明石さんもここの整理ですか？」

明石 「そうなんだけど…」

と言つて明石は自分の後ろを見て

明石 「この艀装、誰のかしら？」

吹雪 「え？分からないんですか？」

ほら、私の他に誰か着任するんじゃないや…」

明石 「いえ、そんな予定は聞いていません…」

と、前置きをして目を細めてこう呟いた

明石 「こんな艀装見たことが無いのよ」

吹雪 「え？」

明石 「ほら、ここには盾の様なものが付いているでしょう？」

駆逐艦の子達が持っているのに近いけど、ここまで大きくないわ。

それに、機関部も戦艦並みの出力は出るけど軽いのよ。」

吹雪 「つまり… チグハグってことですか？」

明石「そうゆうこと  
一体、誰の何だろう…」

と、明石と話していると

「駆逐艦 吹雪 執務室まできてください」

という放送が流れた

吹雪「あ、そろそろいかないと！

明石さんどうもありがとうございます！」 ダダッ

く七海サイドく

七海「ふう…」

俺は今、船に乗り大きめの無人島にある鎮守府… つまり俺の職場  
へと向かっていた

七海「それにしても、長かったな… ここまで」

あの日生まれてから18年その間に様々なことがあった

まず驚いたのが、生まれてから5年、つまり五歳のとき

深海棲艦との戦争状態にあったのだ

それを知り俺はようやくこの世界が

艦これの世界であることを知ったのだ

そして小学校をだらだらしながら過ごし中学か、と思っていると

適正検査と言うものがあり、それで艦娘や提督になる適正をしらべ  
るのだ

そこで俺はとんでもないことを起こしたのだ

提督の適正率が百パーセントなのは良いとしよう 実際たまにあ

るらしいのだが

問題は、

男の俺に艦娘の適正があったのだ

さて、艦娘には2つの種類がある

一つはゲームのように資材から出来る方法

もう一つは艦娘の適正がある者を艦娘とする方法なのだ

その時の俺はたまにそうゆうことがあるのだと思っていたが

適正があるのは艦娘と言う言葉が指す通り女性にしか出ないのだ

なのに男の俺が適正を持っていたためすぐに精密検査が行われた

まあ、理由は解らなかつたらしいが俺は提督となる道を選んだ  
そして、つい先月まで提督になるための学校へ行っていた

そして今日パラオ第1032鎮守府に着任することとなったのだ  
七海「う、うえ 考え事してたら酔ってきた…」

憲兵さん「だ、大丈夫ですか？」

七海「うん、無理かも…」

あ、憲兵さんも一緒に来てるんだっけ

く鎮守府に到着く

七海「う、まだ気持ち悪い」

??「しっかりとしてくださいよ… 提督」

七海「すまない、大淀さん」

この眼鏡のしつかりしていきそうな人は大淀さん

任務や出撃海域など、提督の職務をサポートしてくれるのだ

大淀「さて、そろそろ初期艦が来るはずですからね」

七海「ああ、確か吹雪だな？」

俺の初期艦はくじ引きで吹雪となった

く30分後く

七海「遅いな…」

大淀「ええ、先に到着してる筈ですが…」

待っていて下さいね、放送をします。」

七海「ああ、頼んだ」

そのあと、放送が流れた

ドタドタ

はあはあ

コンコン

吹雪「失礼します！」

七海「どうぞく」

ガチャツ

吹雪「遅れてすみませんでした！」

七海「ああ、構わないさ

取り合えず自己紹介からだ

俺は、如月 七海だ これでも男だぞ？宜しく」

吹雪「はい！ 吹雪型一番艦 吹雪です！」  
さて、何をするかな…

吹雪「何をするのか悩んでいるのでしたら、建造はいかがですか？」

七海「そうだな、よし行くか」

七海「こんにちは」

明石「あ、どうも提督！」

明石です。よろしきお願いしますね！」

七海「ああ、よろしく

所で建造をしたいのだが…」

明石「それじゃあ、使う資源の量を決めて下さいね」

七海「それなら、資源も少ないし最低値で2つ建造してくれ」

明石「分かりました！

妖精さんお願いしますね」

妖精くワカッター

く建造中」

明石「あ、提督この艤装誰のか知ってます？

私には分からなくて…」

あ、やべ先に艤装来てるのか

七海「…」

明石「提督？」

そう、艦娘の適正があると言うことは艤装も使えるのだ

流石にスペックは艦娘が使った方が高いらしいが…

七海「ああ、それ俺のだから」

「ええ!? 本当ですか!?!」

やっばり驚くよな」

そのあと明石にメチャクチャ根掘り葉掘り聞かれた

妖精くオワッタヨ

七海「お、終わったか。

よし、2つ一気にオープン！」

睦月「睦月です！ 張り切って参りましょー！」

如月「如月です お側に置いてくださいね？」

七海「プルプル

明石「え？提督どうかしましたか？」

やった、やったぞ！

おれはなあ、睦月型が大好きなんだよお！

可愛いし、改二だって三隻あるんだぞ、可愛いしだから来て欲しかったんだよ！」

七海以外「」

七海「あ、声に出てた？」

七海以外「はい、だからから聞こえてました」

七海「う、うわー!!」ダツシユ

吹雪「あ、え 提督!？」

睦月「何かスゴい人だね…。」ポカーン

如月「フフ、面白い人みたいね」ニコニコ

↳執務室

七海（あー、はずかし）

吹雪「て、提督！次はいよいよ出撃をしましょうか」

七海「そうだな。吹雪、睦月 如月を呼んで来てくれ」

吹雪「はい！分かりました！」

七海「よし、編成は吹雪が旗艦となり睦月、如月で出撃だ！」

吹雪「わ、私が旗艦ですか!？」

七海「そうだ、頑張れよ？」

睦月「帰ってきたらほめてね？」

睦月はほめて伸びるタイプなんだから！」

七海「勿論だ、頑張ったらな？」

あ、帰ってきたら初日だしパーテイでもしようか」

（睦月可愛すぎるだろ…。）

如月「ええ、頑張るから準備をよろしくね？」

七海「あ、俺もいくよ？」

「「え？嘘でしょ？」」

### 第三話 出撃、提督さんは大忙し（by妖精さん）

七海「の、予定でしたが…」

執務室の机の上にある大量の書類を見て頭を抱えながら、

七海「今回は、やるのが大量にあるので無理」

吹雪達「はあ、良かった」

ん？なんかひどくないか？

吹雪「流石に、提督に出撃させるわけには…；」

睦月「そうだよ！ だから提督は書類作業頑張つてねー」

七海「ちえー、気分転換に海に出たかったなー 深海棲艦と会おうと

落ち込むけど」ムスー

「「あ、可愛い」「」

七海「可愛い言うなー！」

如月「フフ、むくれてる所も可愛いですよ」ニコニコ

七海「うがー!!」

そんなことを暫くしていると大淀さんが来て

大淀「いい加減に仕事をしてくださいね？」ゴゴゴゴ

四人「ハイ、ワカリマシタ」ビクビク

睦月「じゃあ、行ってくるねー！」

七海「おう、行ってらっしゃい」

大淀「提督始めますよ」

七海「ああ、大淀さんが手伝ってくれんなら大丈夫だろ」

く数時間後く

七海「ふう、終わったー」

大淀「お疲れ様でした、提督」

七海「つたく何で初日からこんなに書類が多いんだよ？」

大淀「いえ、むしろ何もなければ初日の方が多いですよ。普段は

もつと少ないです」

七海「なら良かった あ、俺は工蔽へ行つて来るわ」

大淀「分かりました、なら飾りつけをしておきますね」

七海「おう、宜しく」

く工蔽く

七海「明石、居るか？」

明石「はいはい、居ますよっと それで？何のご用ですか？」

妖精くフムフムコンナギジュツガアルノカ

七海「えっと・・・妖精さんは何してるの？」

明石「武器等の発想の勉強らしいですよ？」

いやいや、発想の勉強は良いんだけどさ

何も、アニメを見なくても良いんじゃないかな？

七海「へ、へー あ、そうだ建造を四つ頼みたいんだけど・・・」

明石「資源は最低量でいいですかね？」

七海「うん、宜しく」

明石「分かりました」スタスタ

七海「えーと・・・」

妖精くフンス

七海「か、開発をお願いしたいんだけど・・・」

妖精くナンカイ？

七海「五回で良いよ」

妖精くリヨウカイー

七海「」

妖精くドウシタノ？

明石「提督、建造してきますよ、って提督？どうしましたか？」

七海「妖精さんって・・・凄いんだね」あんぐり

妖精くドヤア

開発結果

ブラスター×1

ビームソード×1

黒の剣士が使っていきそうな黒と白の二振りの剣

四連装ロケラン×1

原子力発電所×1

七海「うん、何処から突っ込めば良いのか分からん」

ブラスターとビームソードは完全にあの有名な星の戦争のやつだ



し黒の剣士は置いていて、

四連装ロケランは完全にメイト○クスさんのだよね？

しかも、原発作りやがった…

妖精くア、ゲンパツハハズレダヨ

七海「ハズレでこれか？」

怖いよ、ほんとに：

明石「え、ほんとですか？」

七海「うん、なら妖精さんもう一回お願い」

妖精くワカッター

結果

「PMG・ウルティマラティオ・ヘカート2」

七海「」

明石「」

ここの妖精さんは凄すぎると分かったのです

く執務室く

七海「うくん、どうしようか」

と、独り言を呟いて考える事は

七海「お店が欲しいよね」

そう、お店が欲しいのだ

一応間宮さんの甘味処や、鳳翔さんの居酒屋等が建設予定なのだ

が…

七海「ここ、無駄に広いんだよな…」

一応自給自足のための畑、田んぼ等はあるのだが、余るのだ

七海「あ、そうだロー○ンと、すき○、なか○に、○ベイルを呼ぼうか」

殆ど何となくである

この後、この店舗が艦娘を使ったキャンペーンを始めるのだが…

コンコン

大淀「提督、失礼します」

七海「お、建造が終了したか？」

大淀「はい、では入ってください」

夕立「貴方が提督さん？私は夕立、宜しくね！」

時雨「僕は白露型二番艦時雨だよ」

夕張「夕張よ、よろしくね！」

島風「島風だよー、速き事風の如しです！」

七海「皆、よろしくな！」

吹雪「提督、艦隊が帰投しました」

七海「お帰り、どうだった？」

吹雪「はい、この海域の敵艦隊は掃討し次の海域に進める様になりました！」

七海「うん、よくやったね 此方の被害は？」

吹雪「軽微の損傷はあるものの大きな損傷はありません」

七海「へニヤ

吹雪「ちよ、提督！大丈夫ですか!?!」

七海「うん、気が抜けたただだから心配しないで」

吹雪「そうですか」

さて、パーティの準備をしなくては

第四話 さあ！素敵なパーティーしましよ！（by 夕立）

（七海サイド）

「厨房にて」

七海「きてきて、何を作るかな。」

俺は前世でも今世でも趣味は料理なのだ！

元々、食べる事が大好きでそこから発展していつて今ではそこそこ上手いと思う

今まで友達に食べてもらっていたからな！

男とか男とか男とか親とか。

あれ？ 友達少ない上に彼女もない？

あれ、何だろう。目から心の汗が。

本人は気づいていないようだが、別に嫌われている訳では無く、ただ近づきにくい程のオーラが出ているとか。

とある女性曰く

「友達になつたり恋人にもなりたいけど、高嶺の花過ぎるし、他からも睨まれるし

何より向こうが可愛すぎて自分の価値が凄く低く見えるのよ!!」らしい

??「あの、私達もお手伝い致しましょうか？」

七海「ん？」

と、心の汗を出しているとアニメや、漫画で見たことのある二人が

??「あ、申し遅れました。私、食料艦間宮です！」

??「同じく、食料艦伊良湖です！」

七海「あ！宜しくね!!」

何で大きな声を出したかと言うと、俺は甘いものが大好物なのだ！

いやー、甘いものって良いよね糖分は大事だよ？

前に荻野に言ったら「お前は女子かよww」って言われてぶん殴

りましたがね

で、間宮さんと、伊良湖さんはスイーツを作るのが得意なんだよな！

間宮の羊羹は有名らしい

七海「じゃあ、皆でこのあと着任祝いのパーティをするから、その為の料理と・・・スイーツが得意なんだよね？」

間宮「はい、出来ますよ？」

七海「じゃあ、それも頼んだよ」

間宮、伊良湖「はい！了解しました!!」  
見せて貰おうか、食料艦の実力とやらを

七海「それじゃあ、皆集まったね？」

大淀「はい、全員居ますよ」

七海「うん、良かった。それじゃあ

オホン、今日からこの提督になった如月 七海だ、まだまだ不馴れなところもあると思うがこれから宜しく頼むぞ！」

夕立「早くしてほしいっばいー

ステキなパーティしましょ！」

時雨「落ち着きなつてば」；

・まあ、長々とやるのも詰まらないだろうしな

七海「よし、じゃあ 乾杯!!」

全員「かんぱい!!」

因みに、七海たちの世界と前世は法が少し違っていて18歳でもお酒は呑める

また、艦娘達もお酒は呑めるのであるが

睦月「提督！ 今日の出撃は私、頑張ったんだよ！

褒めて褒めて」

七海「お、おう 頑張ったな、偉い偉い」ナデナデ

睦月「〜♪」

如月「あら、楽しそうね」ウフフ

吹雪「良いなく、私もやってもらいたいなく」

七海（あれ？もしかして皆酔ってるのか？）

そう、幾ら艦娘でも酔いに強い者と、弱い者が居るのである

基本的に駆逐艦は弱い方である（強い方も居るには居るのだが）

七海「あ、ああ よしよし」ナデナデ

吹雪「♪ 提督、私がんばりますね！」

七海「おう！頼んだぞ」

島風「皆々、早く食べないと全部私が食べちゃうよ 食べるの

だって早いんだから！」パクパク

七海「あ、やつべ!!」

そうそう、間宮さんと伊良湖さんの料理は早い上にとても美味しかったです

いや々、皆が喜ぶ訳が分かりますよ

え、俺の料理？

全部美味しそうに食べてくれましたよ

俺が作ったのもあるって言ったら皆びっくりしてたな

美味しそうに食べてくれたのでやりがいがあるよな

〜次の日〜

七海「あー、頭が痛い…」

昨日調子に乗って呑みすぎたか

大淀「提督、今日の出撃予定は？」

七海「取り合えず演習や、出撃で速度を上げるようにしてくれ」

大淀「はい、了解致しました」

速度は大事だな、改や、改二にするのには速度が高くないと

七海「さて、俺は開発をしに行くか」

… あんまり行きたくないんだよな、何があるか分からないから…

〜工蔽〜

七海「明石、いるか？」

明石「はい、居ますよ」

夕張「あ、提督！ おはようございます」

そうそう、夕張もこうゆうの得意だっけ

明石「それで、提督何をしますか？」

七海「建造を軽巡狙いで二回、後は開発で欲しい物があつてな・・・」

明石「欲しいもの？」

七海「ああ、海水を普通の水に変えるろ過の機械を二つな」

ここは、無人島である。水道もないし川だつてあるには有るがあまり飲みたいとは思わない

明石「分かりました。では私は建造をしてるので夕張は開発を宜しくね」

夕張「はい！分かりました！」

妖精<ハナシハキイテタヨ>

夕張「さて、やりますか！」

夕張「」

七海「またか・・・」

ろ過用の機械はいいよ？でもさ、

「開発結果」

ろ過用マシン×2

トマホーク×2

シースパロー×1

自動防衛システム付きのガトリング砲×5

高射砲×4

極めつけはこれだ

仮面ライダーWのドライバー

ロストドライバー 一つずつ

ガイアメモリ×7

七海「なんでドライバーができるのかな？」

妖精<テレビデミタカラマネシタクナリマシタ

だと思つたよ・・・

流石にエクストリームメモリとT2ガイアメモリはないみたいだ  
けど・・・

うわ、フアングメモリは動いてるし

七海「これって、俺に適正はあるの？」

妖精くハイ、ジョウカー、メタルトリガーメモリは適正ガ有ルミタ  
イデス

まじか、だからロストドライバーまで…

まあ、いいや

七海「じゃあ、貰っとくね」

妖精く機械類ノ設置ハオマカセアレー

夕張「ちよつと!?!提督何てものを作ってるんですか!?!」

七海「いや、勝手に出来るからなれたほうが良いよ…」

まだここに来て二日目なのにな…

明石「提督、建造が終わりましたよ」

七海「お、だれだった？」

明石「じゃ、自己紹介をしてもらいましょうか」

神通「神通です…宜しくお願致します」

天龍「俺の名は天龍 フフ、怖いか？」

七海「いや?全然？」

天龍「なっ!／／／」

あー、恥ずかしがらせちゃったかな?

天龍「ウガー!」

七海「いいて! やめて!」

七海「なにはともあれこれから宜しくね!」

神通「はい!宜しくお願致します!」

七海「さて、スイーツでも食べに行くかな♪」

## 第五話 提督の戦い へ 艦装編へ

七海「あー、やっぱり間宮さんのスイーツは美味しいなー♪」  
いや、本当に糖分は大事だし、甘い物は良いよねへ

今俺は、妖精さんの手によりいつの間にか出来ていた甘味処 間宮  
にいる

間宮「そう言ってもらえると、こっちも嬉しいですよ」ニッコリ

七海「だよねへ自分が作った物を美味しいって言って食べてくれる  
のは嬉しいよね！」

料理をするときに考えることは、味と時間と、喜んでもらえるかだ。

神通「提督、隣よろしいですか？」

七海「んあ？良いよ」

その時入って来たのは神通さんだ

今日は、他の駆逐艦の子達と演習をして、それが終わった後のそう  
だ

七海「で、あの子達の首尾はどうなの？」

神通「はい、皆しっかりやれていますよ」

七海「そうか、それは良かったよ」

で、その時思い付いた事があるんだ

艦娘と、模擬戦をしたらどうなるのか

七海「神通さん」

神通「はい、何でしょうか？」

七海「この後さ、僕と模擬戦してくれないかな？」

神通「え、良いですけど」

その時の俺は知らなかったんだ

神通さんが鬼教官ということ

いや、忘れていたのかもしれないのだけれども

へ 海上へ

神通「それでは、良いですか？」

七海「ああ、良いよ」

俺の装備は、



12・5センチ連装砲

61センチ四連装酸素魚雷

後は、妖精さんにつくってもらった絶対に折れない木刀と盾である

神通「それでは、提督だからといって容赦はしませんよ？」

七海「そんなことは、分かっているよ」

しばらくどちらも動かなかったが、何処からか水の落ちる音が聞こえた

その瞬間、二人は動き出した

神通「はっ！」 ドドーン！

七海「ふっ！」

神通さんが撃ってきた二発の砲弾を、俺は機動力で避けるちなみに、弾は全て訓練用のペイント弾である

七海「おりやあ！」 ドーン！

神通「当たりませんよ！」

七海（流石に避けられるか。）」

俺が牽制で撃った砲弾も軽々と避けられる

神通「魚雷発射です！」 パシユツ

七海「ッ！ どこだ！」

はつきり言つて、軽巡の攻撃で一番怖いのが雷撃である

酸素魚雷だと、見えにくい上に音もそんなにしないのである

七海「！ そこか！」 ドーン！

神通「！ なかなかやりますね。」

やっと分かった魚雷の位置に砲弾を撃ち込み爆破させる

そして、俺は速力を上げ神通さんに近づいていく

七海「撃てッ！」 ドドーン！

神通「まだまだです！」

七海（くっそ、熟練具合が違いすぎる。）」

後から聞いた話だと、神通さんは別名鬼教官と言われており、強いはずである

神通「今度は、こちらからです！」 ドーン！

七海「まずっ」

砲撃の後の隙を狙って砲撃をしてくる神通さん

幸い砲弾の軌道は分かるのだけど、木刀で斬るにしても爆発してこちらがダメージをもらってしまおう

七海（どうする、どうする!?!）

自分では気付いていなかったが、この時周りの時間が遅く感じられた

俗に言うゾーンである

七海（そうだ！これなら

いや、まだまだ、もっと被害を最小限にしないと

そこで考えたのがこれである

七海「うりゃあ！一か八かじゃあ!!」ギャリン!!

神通「そんな!?!」

機関部に付いていた盾を取り外し、受け止めるのではなく

受け流したのだ

結果、うまく行き砲弾は違う方向へ飛んでいった

七海「今の内に！」ドドーン！

神通「くっ！」小ダメージ！

そして動揺している内に砲撃し、小ダメージを負わせた

七海「オラアアアア！」

そして、木刀を持ち盾を使い砲弾を逸らすつもりだったのだが

神通「甘いです！」パシユツ！

七海「ガッ!?!」大破！

余りにも近すぎたため、魚雷を喰らい大破判定を貰ってしまった

七海「あくあ、負けちゃったなー!?!」

神通「あそこは木刀ではなく、主砲や魚雷のほうが良かったですよ」

七海「そうか... 一番ダメージを与えられそうなのが木刀だったけれど...」

模擬戦をした結果自分はまだまだなのだ、痛感させられた

神通「そうだ、提督」

七海「ん？」

神通「刀や、剣を使うなら天龍と模擬戦をしたらいかがですか？」

七海「そうか、天龍か。」

木刀を使つてはいるけれど、理由は、軍刀を持っているからと、近距離攻撃があつたほうが良いかと思つたからである

だから、振り方や戦い方は完全に素人である

七海「よし、ありがとな神通！」

神通「私で良ければいつでもお相手致しますよ」ニツコリ

七海「天龍ー、いるかー？」

天龍「ん？何だよ、提督 俺に何か用でもあるのか？」

七海「ああ、俺に刀の使い方教えてくれないか？」

天龍「あ？何でまた急にそんなことを言い出したんだよ？」

七海「実はな。」

少年？説明中。」

七海「で、神通さんに刀を使うなら天龍について言われたからここに来た訳」

天龍「そうゆうことか。」

七海「頼めるか？」

天龍「俺だつて誰かに教えて貰つた訳じゃ無いんだぞ。」

七海「そこを何とかさ。」

天龍「うくん。まあ、良いか」

七海「本当か!？」

天龍「おう！提督の頼みじゃあしようがねえな！

教え方は、多分下手だと思ふがいいか？」

七海「ああ、勿論だ」

天龍「そんなにすぐに上達する訳じゃないから、まあ気楽にやつていこうかね」

七海「何か必要なものはあるか？」

天龍「んー。俺の分の木刀と、練習用のカカシとかそのくらいかな？」

七海「そうか、分かった」

天龍「その代わりと言っっちゃ何だけだよ」

七海「ん？」

天龍「今度、何か一つお願い事を聞いてくれないか？」

七海「出来る範囲なら出来る限りしてやるよ」

天龍「お、言ったなく」

七海「その顔は悪巧みしている顔だろ…」

天龍「へへ、冗談だよ　じゃあ明日からよろしくな！」

七海「おう、よろしく」

それからしばらく、天龍と刀の練習や実戦形式の模擬戦  
神通との模擬戦をしている提督の姿がよく見られたらしい  
しばらくは闘う提督さんと呼ばれたようである

## 第六話 提督の戦い ～仮面ライダー編～

七海「うゝむ、これ貰ったは良いけど使い道あるのか？」

神通さんや天龍との訓練を開始してからしばらくしてから、俺は執務室でこの前に貰った

仮面ライダーWのロストドライバーを眺めて呟いた

大淀「何なんですか？それ」

七海「ん？これはね、まあ町で暴れたりする怪物をやっつける為の道具・かな」

大淀「なら、深海棲艦との戦いで使えば良いじゃ無いですか」

七海「それは考えたんだけどね」

大淀「何か問題でもあったんですか？」

そう、大問題が合ったのだ

七海「これを付けて変身するとき、艤装がつけられないんだよねだから、海に沈む。」

大淀「そんな事が」

七海「それに、これ対人とか人の形をした物と戦う用だから駆逐級とかだと戦いにくいんだよね」

大淀「戦いにくいとは？」

七海「俺が今変身出来るのは3つのフォーム何だけど、2つが格闘タイプなんだよね」

後一つは銃撃が出来るから戦えない事はないけど」

しかも、ロストドライバーでの変身は仮面ライダー・ジョーカーだと最終回くらいしか覚えていない。

それだけ少ないのだ。

Wと比べるとパワーも半減するのでテクニックが必要にもなる。

七海「まあ、まずは海に出ても沈まないで浮く方法を考えないと」

大淀「何かに乗るとかはどうですか？」

七海「そんな乗り物あったっけ・あ」

大淀「え、あるんですか!？」

普通に有った、しかも仮面ライダーWで主人公である翔太郎やファイ

リップが愛用しているマシン

ハードボイルダーだ。

厳密には、水上戦用に後部のユニットを変更したハードスプラッシュャーや、空戦用のハードタービュラー等がある。

そして、これを作るのならもう一つ欲しいのがリボルギャリーである。

これは、先程出たハードボイルダー等を格納したり、ユニットを格納したり、またリボルギャリーが走ったり、かなりの固さを誇るため障害物としても使える。

まあ、リボルギャリーには水上機能は無いので付けてもらうしかないが、そこはこの妖精さんにお任せだ。

く工蔽く

七海「と言うわけで、これ等を作ってくれませんか？」

妖精さんくシーイイヨー

七海「ありがとうございます、今度美味しいお菓子を持っていきますね」

妖精さんくヤッター！ガンバルー！

七海（凄い、微笑ましいな。）」

翌日

妖精さんくモウカンセイシタヨー

七海「次の日にはもうできてるんですか。流石ですね。」

妖精さんくフンス

そこには、その世界でしか見たことが無かった、リボルギャリーの本物が鎮座していた。

中を見ると、ちゃんとハードボイルダーや、水上、空戦用のユニットが格納されていた。

七海「一回聞いてみたいんですよね。何が作れないのか。案外何でも作れるのかもしれないな。」

くとある海域く

七海「さて、遂にこの鎮守府に着任してから初の出撃か」

吹雪「普通は提督は出撃しないんですけどね。」  
一応、一人では何かあつたときに困るので吹雪についてきて貰った  
別にぼっちが寂しいわけではない、繰り返す寂しいわけではないぞ

！

あ、ちゃんとハードスプラッシュャーに乗っている

七海「まずは、変身してみるか」

ジョーカー！

七海（やっぱ、かけーなこの声）

七海「変身！」

変身音が流れそこには、黒い仮面ライダーが立っていた

作者（あ、仮面ライダージョーカーと調べれば出てくるから調べて  
くれ！）

おい、作者

七海「うお、凄いな。音も遠くまで聞こえるし遠くまで見える」

吹雪「わあー、凄いですね！」

七海「カッコいいものが好きな奴らは喜びそうだな」

天龍とか天龍とか天龍とか

天龍「ヘックション！ な、何か良いものを見逃した気がする。」

七海「よし、フォームを変えるか」

トリガー！

七海「あ、出てきた」

身体の色が青一色になると同時に出てきたトリガーマグナムを掴

む

吹雪「へー、そんな風に変わるんですね。」

七海「本当はもう少し多いがな」

実際は十二種類位だったか

その時、深海棲艦が近くの海面に浮上した

吹雪「提督！深海棲艦です！」

七海「種類と数は？」

吹雪「えっと、駆逐イ級が一隻です！」

七海「そうか、ならこいつは俺に任せろ」

吹雪「え？」

七海「何言ってるんだよ、今回はこれのテストだぞ？」

吹雪「分かりました、無茶はしないでくださいよ？」

七海「分かっているって！」

イ級「ギヤアアア!!」

七海「うお、うるせ！」

ハードスプラッシャーを走らせてイ級のところまで来たが、アニ  
メでもこんなに煩かったっけ。

七海「よし、始めるか！ って、これは言ってみたかったんだよな」  
そう言ってる俺は、イ級にトリガーマガナムを向けて

七海「さあ、お前の罪を数えろ」

七海「オラ！」ピュンピューン

主砲よりかなり軽い音をたてて飛んでいく弾、実際はエネルギー弾  
なので軽いはずである

イ級「ギヤアアア!!」ドーン！

が、スピードで狙いが甘く外れ反撃を許した

七海「当たらないよ!!」

だが、こちらにもスピードはあるのだ、当たらずに並走をする

七海（当たらないな。なら、当たるところから射つまで！）

七海「これで、ツどうだ！」

イ級「ぎゅうううういいいいい！」撃沈！

流石に超至近距離から外す訳もなく撃沈させた

吹雪「お疲れ様です、提督帰りましょうか」

七海「おう！」

変身を解いて吹雪の所まで行くと、そんな言葉が来た

七海は、帰ろうと言えるのが何よりも嬉しかった

（鎮守府）

大淀「あ、お帰りなさい。提督」

七海「うん、ただいま」

大淀「どうでしたか？」

七海「実戦に使うには、まだまだ訓練が必要だよ。」



大淀「提督は戦場に立たなくてもいいんですよ？」  
そんなことを言われて、俺は少し固まってこう言った

七海「皆が戦ってるんだ、そんなことは出来ない。俺だって守りた  
いんだ」

大淀「提督」

執務室はしばらく無言だった

それから数ヶ月後、提督の意思を試し

最大の苦難となるであろう事が起きる

## 第七話 ウェーク島攻略作戦!

神通達との訓練を始めてから2ヶ月位経った頃の事である。

七海「ウェーク島攻略作戦?」

大淀「はい、大本営からの指示でウェーク島付近に新たな基地を設立させるためその近くの敵艦隊を攻撃せよとのことですよ」

七海「いよいよ、そちらの方に進出してきたか?」

大淀「提督達の間では、間も無くミッドウエー海域への進出が近いとか。」

七海「そうか?」

ミッドウエー海域が近いということは映画版か?

確か、特殊な深海棲艦がいたな。

確か、吹雪棲姫って俺は呼んでたっけ?

アイアンボトムサウンド、しかも変色海域には気を付けないといけないな。

なぜ俺は、ここでもう一人出てくるはずの艦娘を出していないかったのだろう。

そして、ウェーク島と言えばあの話だとなぜ分からなかったのだろう。

もしかしたら、思い出したくなくて忘れていたのかもしれないな。

七海「開始日時は?」

大淀「来週の今日のようにです」

七海「分かった、遠征で資源や高速修復材を集めるように指示してくれ。」

こつちも任務で集めるようにする。」

大淀「了解致しました」

一週間後

七海「よし、編成はできたか?」

大淀「はい、主力となる第三水雷戦隊は、川内、神通、那珂、吹雪、夕立、睦月となります」

七海「支援艦隊は？」

大淀「第四水雷戦隊また、危険な場合遠征中の艦隊が支援に参加する予定です」

七海「分かった、関係する艦娘に説明をよろしく頼む」

大淀「分かりました、それでは失礼いたします」パタン  
いよいよ、ウエーク島攻略作戦か

あれ？何かこれに似ているものがあつた気がするな  
何で有つたんだつたか覚えていないな

ま、取り敢えず工蔽へ行つて艦装のメンテナンスや開発をするか  
何か嫌な予感がする。俺も出撃するべきか

工蔽に来てその予感は消えることがなかった

明石「どうかしましたか？提督、凄い顔してますよ？」

七海「え？そうなのか？」

明石「心配事があつてしょうがない！、つて顔ですよ」

七海「ああ、少し嫌な予感がしてな」

明石「うくん、取り敢えずこれをかたづけしてしましましょうか」

七海「おう」

七海「駄目だ、まだ嫌な予感がする。なんだ？何かあるのか!？」ウ  
ロウロ

ゴツ！

七海「うわ！」ドサア

大淀「ちよ、大丈夫ですか？」

七海「はは、ごめんごめん」

大淀「全く。ダメですよ、慢心したら」

七海「そうだね、慢心は、いけな、い」

大淀「提督？どうかしましたか？」

やっと、思い出した

しかも、俺が好きな艦娘が標的！

ネットでも大騒ぎになり、大論争が勃発した事件  
まずい、だとしたら行かないと!!

七海「すまない、大淀！おれも、出撃してくる！」

大淀「ええ!? どうかしたんですか!?!」

七海「大淀はここで待っていて!」

待ってるよ、今回は助けるからな

如月!

七海「明石、状況は!?!」

明石「え?! い、今は敵軽空母二隻と戦闘中ですが

くっそ、不味い時間がない!

七海「よし、俺も行ってくる!」

艦装を装備し、ハードスプラッシュャーに乗り込む

こちらの方が速いのだ

くウエーク島海域周辺

七海「どこだ!?! 皆はどこにいる!?!」

さつき、無線で聞いた話だと吹雪が魚雷を打ち込み一隻撃沈したら

しいが

吹雪「え、提督!?!」

七海「吹雪か、ちようどいい。今どうなってる!?!」

吹雪「えつと今さつき、二隻目を撃破して敵水雷戦隊も撤退して

いったらしいですけど

七海「なに!?!」

不味い、それだともうすぐじゃないか!

吹雪「て、提督? 何でそんなにあせっているんですか?」

如月は居た! こそそこ遠いが急がなきゃ!!

七海「悪い! またあとでな!」

吹雪「あ、提督待って!」

く如月サイド

こんにちは、如月です

今は、姉の睦月ちゃんがピンチだったので、その援護で近くに居た  
敵水雷戦隊を撃退していたの

如月「良かった。これでもう大丈夫そう。」フウ  
出撃する前に睦月ちゃんが言いたいことがあるのって言うてくれ  
たのよね。」

何かしら・楽しみね♪

七海「おー、き、らぎ！そこ、き、だ！はなれ、！」

あら？提督さん？何でここにいるのかしら。」

ヒュオーツ

如月「やだ、髪が傷んじやうじゃない。」

そんなとき、後ろから艦載機のような音が。」

如月「。」

不思議に思って振り向いて見るとそこには敵艦載機が。」

如月「つ!!」

しまった、油断していたわ!!

まさか敵が残っているとは。」

私はもうだめそうね。提督がこっちに向かって来てるけど。」

七海「如月!!どいてろ！」ドガッ!

如月「きやあ！」

な、なにが起きて。」

ドガアアアアン！」

如月「え。」

く七海サイドく

七海「おーい、如月!ほこは危険だ!はなれろ！」

駄目だ、聞こえてない。」

まずっ、!もう後ろにいる!?

ああ、駄目だ如月!そんな諦めたような顔をするな!

こうなったら。」

七海「どいてろ！」ドガッ!

如月「きやあ！」

おれは、ハードスプラッシュャーを蹴り飛ばしその反動で如月の方ま  
で飛ぶ

そして艦装についている盾で如月を吹き飛ばし、爆弾の方に向ける

これで後悔はない、睦月や、如月の笑顔は守れたか。  
ドガアアアアン！

く如月サイドく

今、なにが起きたの？

提督が私を吹き飛ばして自分が爆弾に当たって  
ドサツ！

如月「なに、これ。こんな嘘よ！」

そこには、服はぼろぼろになり左腕、両足が無くなり、そして胴体  
全体に火傷を負った提督が。

如月「い、イヤアアアアアア!!」

夕張「き、如月ちゃん!? どうしたの!!」

如月「ゆ、夕張さん、て、提督が。あ、ああ！」

夕張「お、落ち着いて！」

七海「ゴボツ！ ゆ、夕張と如月か？」

夕張「ええ、そうですしやべらないでください！」

七海「悪いな、こんな、ガボツ！ゴホツ！不甲斐ない、ていとく、で、」

如月「いいえ、違います！私が。私が油断をしていたせいで!!」

七海「そう、じぶんを、せめる、なつて、な？」

如月「で、でも。」

七海「はは、ひーろーみたいにかけつけたけど、だめだったや。」

夕張「提督！ 静かにして!! 直ぐに応急手当をして鎮守府へ行  
きますから！」

私が、私が油断していたせいで。提督が。  
次回へ続く

## 第八話 提督が眠りにについている時

く如月サイドく

如月「明石さん！提督は、提督はどうなっているんですか!？」

明石「残念だけど、提督を蘇生させるのはかなり難しいわよ。体力も消耗しているし、血が足りてない。」

今は、妖精さんが作った生命維持装置のお陰で生きているけど、一週間が限度よ!？」

如月「そんな。」

で、でもバケツがあるんだから、それを使えば。」

そうよ、きつとそうよ！私達は高速修復材で回復するわ。」

だったら、艦装の適正がある提督も回復するはずよ。」

明石「いいえ、無理よ」

如月「どうして!？」

明石「提督には、確かに艦装の適正があるわ、でも肝心なのは艦娘じゃないと言うことよ。」

あれは、艦娘じゃないと作用しないの。だから、無理よ！」

そんな。何でよ

如月「明石さん、何ですか、何で提督を助ける方法を言ってくれないんですか！」

提督を助ける為なんです！何でも良いから案を出してくださいよ

!!

明石「そんなの。あったらもうやってるわよ！」

でも、それでももうだめだから言っているのよ!?!それを解りなさい！」

如月「ッ！」

でも、提督が怪我をしたのは、私が油断をしていて、そのせいで。」

明石「如月ちゃん、」

その時、明石さんがしゃがみこんで私の顔をのぞきこんだ

明石「提督はね、如月ちゃんが傷つくのが見たくなかったのよ

何があったかは知らないけど、かなり焦っていたわよ」

傷つくのが見たくないなんてエゴみただけでねと、明石さんがそう言った

明石「如月ちゃん、私がなにを言いたいかと言うとね、あれは提督がやりたくてやったことよ？もしも自分のことを守りたいなんて思っていたら庇わないわよ、普通は。」

だから、あれは提督が如月ちゃんを大切に思っていたからやったことよ如月ちゃんが取り乱すことじゃない。

今やるべきことは、もう二度と自分と親しい人たちを無くさない様に強くなることよ。」

如月「は、はい。」

明石「そうね。ついでに弔い合戦でもやってもらいましょうかね。」

そのあと、一週間もたたないうちに鎮守府海域、またウエーク島付近の深海棲艦が消えたという。

く深海サイドく

??「ヨオ、姫様ヨ。久々だな」

???「ナンノヨウナノ？レ級」

レ級「イヤイヤ、ナンカオモシロソウナモノヲヒロツテナア、カイゾウデキナイカトモツテキタンダヨ。」

集積地棲姫サン」

そう言って取り出したものは

集積地「ナニヨ？コレ？」

レ級「サアネエ？艦娘ガマタナンカツクツタンジャネエノ？」

集積地「ナンカノメモリーミタイネ。」

七海が攻撃された時に落としたガイアメモリだった

集積地「トリアエズ、解析ヲシテオクワ」

レ級「タノンダヨ、姫様」

そして、集積地棲姫が去るとレ級は楽しそうに

レ級「ドウナルカ、タノシミダナア。キヒヒツ！」

楽しそうに笑っていたのだった

く七海サイドく



七海「ああ？ここってどこだよ？」

七海が目を醒ました時は、全くどこか分からないところだった  
いや、分かるのは船の上だということくらいだった

七海「しようがねえな、ちよつと歩き回ってみるか」  
船の探検も楽しそうだしな！

完全に、自分がどうなっていたのか忘れていたのであった  
…  
暫くして

七海「いやー、珍しい物がたくさん見れたなあ」  
そうだ、まだ操舵室は見えないな。見に行こうかね」

少年移動中

七海「うお、なんか他にも船がある」

軍艦なんて前世でも見られなかったしな

七海「で、良く良く考えると俺、死にかけにならなかったっけ？  
そして、なんでこんなところに居るんだよ？」

まあ、誰も知らなそうだな

??「あら、気がついたのね」

七海「え？」

今だれもいなかったよな

??「はじめまして、いや」

ここで会うのははじめましてかしらね？」

七海「いや、お前だれだって」

??「あれ？自己紹介まだだった？」

それじゃ、するわね」

七海「え？如月」

そこには、何故か如月が立っていた。

如月？「うーん、外れではないけれど、当たってもいないわね」

七海「なら、お前はいつたいたいなんなんだよ」

如月？「だから、自己紹介するわよ？」

はじめまして、私は駆逐艦 如月の大元、総合体だと思つて貰つて

良いわね」

七海「え？総合体ってどうゆうこと？」

いきなりすぎて、話に着いていけない。

如月「まあ、簡単に言うとな、貴方が知っている如月は、私の分身みたいなものよ。」

七海「分身。」

如月「そして、私はその分身達から情報を得ているの」

七海「へー。」

そんな感じなのか。

七海「なあ、それってほかにもいるのか？」

あと、なんで俺はここにいるんだ？」

如月「両方とも、説明出来るわね。」

まずはひとつ目、私みたいな総合体は他にもいるわ、と言うか総合体が居るから艦娘として分身が現れるのよ

だから、艦娘として居る船は総合体があるわ」

七海「成る程。」

如月「あと、少しいかないといけない所があるから、そこでじっとしてて」

七海「え、何を。」

そんなことを思っていると、俺は白い光に包まれた。

七海「あれ？」

目を開けるとそこは、また甲板の上だった。

七海「おーい、如月、どこだー？」

如月「ここよ」

七海「えっと、後ろの方たちは？」

如月「私の姉妹よ？」

なんと、如月の後ろからは睦月型が全員集合していた

如月「で、なんでここに居るかでしたっけ？」

七海「ああ。」

睦月「それはね、提督さん貴方が如月ちゃんの身代わりになったからだよ？」

七海「え？」

卯月「普通の提督は海に出ないし、出れても身代わりにはならな

いっぴよん！」

弥生「だから、如月姉さんがここに呼んだんですよ。」

臯月「まあ、ほとんど如月姉さんが一人で決めてたけどね。」ニヤニヤ

水無月「止めときなよ。」

文月「で、如月姉さんが恩返しをしたいらしくてここに呼んだんだよ。」

七海「ん？なんでだ？」

身代わりになって攻撃を受けるのはあるはずなんだが。」

三日月「理由は、まず貴方が提督だから、

もうひとつは、ウエーク島という場所の影響です」

如月「私の分身は、惹かれるのかよくあそこで沈むのよ。」

長月「で、そこで提督が身代わりになって死にかけになったからここにいてって訳だ」

菊月「まあ、早い話お礼としてしたいことが有るそうだ」

七海「お礼？」

如月「ええ、3つ選択肢があるわ

まずひとつ目は、提督として復帰すること、まあ向こうの子達は喜ぶでしょうね

二つ目、一回魂を転生させてまたこの世界に戻るか、二回目でも良いてって人が居たのよ。」

3つ目、これが一番厳しいわね」

七海「厳しいって。」

お礼じゃ無いのかよ。」

如月「3つ目は、艦娘として生まれるか、よ。

もちろん戦わないといけないし、男から女にならないといけないからね。」

七海「うくん。」

如月「どうするの？」

次回に続く、いや続け

## 第九話 ただいま（七海？）

七海「うくん、因みにお前たちはどれを選んで欲しいんだ？」  
かなり悩むので如月に聞いてみた

如月「え？どれも良いわよ。私が決める事でもないし。」

七海「うくむ。どうするか。」

で、しばらくしての考えがこれだった

七海「よし！決めた！」

俺は、艦娘としてあっちの方に戻るぞ！」

艦娘になる方法だった

如月「へえ。理由を教えてくださいかしら？」

七海「まずは、面白そうだから、俺の行動の理由の基本はコレで決めるんだよね

それと、成りたかったから、かね。如月も何か安心した表情してたし」

如月「ええ。まあなつてほしいとは思っていたけど。でも、いいの？戦わないといけないのよ？」

七海「いや、むしろ戦いたいんだ。」

如月、いや俺の鎮守府の皆を護る為に。」

如月「ふうーん。」

俺の考えを聞いた如月は、少し悲しそうな顔をして

如月「分かったわ、でも気を付けなさいよ？」

俺が、鎮守府の皆を護るとか思ってたらやられるわ、考え方を変えなさいよ？」

七海「え？それってどうゆうことだよ？」

どういふことかよくわからなかったから聞いてみた

如月「自分で考えてみなさいよ。もしそれでも分からなかったら、貴方の所の如月が教えてくれると思うわ」

七海「へ？」

如月「まあ、あんまり無茶苦茶してると、だけどね。でも、そんなことはしてほしくないのね」

七海「あ、ありがとう。優しいんだな」

如月「べ、別に良いじゃない！仮にも助けてもらった人よ？そうするわよ」／／／

七海「そりやそうか」

何か如月の顔が赤いが、何なんだろう。照れてるのか？

如月「さて、準備をしてくるから、あと長月と菊月が話が有るそうよ？」

七海「おう、分かった」

何なんだ？話って

長月「あ、来てくれたのか」

七海「まあな」

流石に呼ばれたのに来ない失礼なやつではない

七海「で？話って何なんだ？」

菊月「ああ、その事なんだがな、お願いがあったから呼んだんだ」

七海「お願い」

菊月「うん、でお願いの内容はそちら側の長月、菊月、それと綾波も探してはくれないだろうか？」

七海「は？お前らと、綾波を探せと？」

長月「概要だけ言うとな。ある一定の日から、全鎮守府からこの三人が消え、

また建造やドロップでも出なくなっただ。

原因は不明で此方も分身達から情報を得られなくなったんだ。」

七海「消えた」

そんなことが有るのだろうか

菊月「一応、この三人は一人ずつ居るようだが、少し他とは違っていてな。何かこう、混ざっている感じなんだ」

七海「混ざってる？つまり純粋な物とは違うのか？」

菊月「そうなるな」

七海「そんなことが有るのか」

長月「私達はコイツらが何か関係をしていると思っっているんだが。問題は、何故消えたかだ。」

七海「突然居なくなっただよな。うくんわかんねえな」

長月「だから、私達の分身、いや言い方を変えるか

私達を見つけたら保護をして話を聞いてみてくれ」

七海「分かった、探してみるよ」

見つかるかどうかは分からんけどな」

如月「準備ができたわ」

七海「そうか」

いよいよ、戻るのか。なんて言われるか不安だなあ」

如月「あんまり心配しなくていいのよ、ただいまって言えばいいの」

七海「そうだな」

如月「ああ、向こうに戻ってもたまたまに私達が話しかけたり、話したいって思えば話せるわよ」

七海「へー、便利だな」

如月「長月や、菊月への連絡に使ってみなさいな」

七海「そうだな。早く見つけないといけないな！」

如月「そうね。つとそろそろ良いわよ」

七海「ああ、世話になったな」

如月「ええ、またね、とは言いたくないけどちゃんと向こうの子達の気持ちわかってあげなさいよ！」

七海「？」

どういう事だろうか」

如月「はあ、まあ良いわそれじゃあね」

七海「さようなら！ありがとな!!」

如月「行つちやつた」

思い、伝えなさいよ。そっちの私

く鎮守府の如月サイドく

如月「ん？」

何か託された気がするんですが」

妖精さん「如月さん、提督を運びますね」

如月「分かったわ。え？」

妖精さん「皆々！提督を工蔽に運ぶんだ！」

妖精さん、s<了解！

如月「え、ちよつと、待って〜！

提督を、どうする気い!？」

妖精さん「大丈夫ですよ、ちよつと色々するだけで」

如月「色々つてなによ!？」

凄く、心配なんだけど!？」

妖精さん「あ、あと二十分待つてください！

そうすればどうにかかります！」

如月「?」

なにをしているのか

二十分後、工蔽

如月「あら？建造なんてしてたっけ？」

妖精さん「私達がさつきしたんですよ」

如月「ふーん」

妖精さん「それでは開けてみましょうか」

妖精さんが、建造所のドアを開けるとそこには、

少し色が薄いけど、睦月ちゃんや、私のような睦月型の制服を着て  
いて

髪は、黒くてポニーテール、ちよつと小さいかしら？

そして、私達より胸部装甲がある、ですって!？」

具体的には、天龍さんくらいね

如月「ま、負けた」

??「なにがだよ？如月」

如月「え？」

このしゃべり方、まさか!？」

??「一週間ぶりだな、如月」

如月「まさか、提督、なの？」

七海?「ああ、そうだ」

如月「て、提督、う、うわーん!!」ダツ!

七海?「うわ!」ドシ

如月「提督の、バカ！し、死んじゃったと、思った、のよ！」

七海？「まあ、俺も艦娘になったけどな。」

如月「そんなことは、良いのよ！ちゃんと、帰って、きて、今ここに居るんだから!!」

七海？「そうだな、如月。心配させてすまなかった。」

如月「全く、本当よ！」

七海？「アハハ・如月」

如月「なあに？提督」

七海？「ただいま」

如月「お帰りなさい」



## 第十話 不幸だ (by元提督)

七海「つうか・お前改二になってるけど・なんで？」

如月改二「あはは・それは、まあ、そのー」目を逸らす

七海「え？何だつて？」

如月「いやー、ストレス発散とか、恨みを込めて深海棲艦をボコス  
もとい、攻撃してたらこの辺の深海棲艦一掃しちゃって

連度も改二にできる位上がったから、改二になっちゃいました  
？」テヘツ

七海「いや、テヘツじゃないからね!？」

なにしろつと凄いいことしてんのさ!？え、一掃!？今この辺に深海棲艦  
居ないの!？」

つか、他の改二はいるの？」

如月「うん、姉さんと、時雨ちゃんや、夕立ちちゃんあと、摩耶さん  
と鳥海さんと」

七海「まで、うちに摩耶や鳥海なんていたか!？」

如月「ああ、ドロップとか、スカウトで増えたのよ」

七海「提督がいないうちに何してくれちゃってるんですかねえ？」  
ゴゴゴゴゴ

如月「ま、まあ戦力も増えたし、賑やかになったでしょう？」

七海「そうだがなあ、お前s、つて何か誰か走つて来てないか?!」

睦月改二「提督ーーーーーーーー!!!」七海へダイレクトアタック!!

七海「ゴフウ!？」

提督ー!？、司令官ー!!、クソ提督!

うわあ、何か艦娘がいつぱい居たあ

え、何人居るんですか？これ？

うお、一、二航戦の方々まで

うん、叫ぼうか

七海「不幸だあーーーーー!!!」

つて、ギャアアアアアアアア!!」

く執務室く

七海「ハアハアハアハア」

大淀「あ、あれは凄い光景でしたね」；

七海「本当だよ!!」

皆泣いて歓迎してくれたのは嬉しいんだけど、皆が駆けつけるから  
もみくちやになったよ

只でさえ身長無いのに

七海「でも、まあ皆に心配かけたからなあ」

大淀「睦月型の皆なんか修羅みたいになっていましたよ」；

抑えるのが大変で、と、大淀さんの談

あ、そうだ睦月型と言えば

七海「ねえ、綾波、長月、菊月が居なくなっただって本当か？」

大淀「そうみたいです」

私達が此処へ着任する前からのようですが

七海「まあ、どっち道捜すか」

姉さん達のために

七海「そうだ、一回大本営にいかないとまずいかな」？

大淀「そうでしょうね」

提督、死亡扱いになってますから

七海「まあ、提督としての俺は死んだ訳だけど」

大淀「これからは、艦娘として生きていくんですか？」

七海「まあ、な」

考えると、凄い経歴だよな

一度死んで、艦これの世界に来て、提督になって、また死んで、艦  
娘になるって

どんだけだよ、なんで二回も死んでる事が分かるんだよ

七海「と言うわけで、今日の夜にここを出発し、明後日大本営に顔  
を出しそのあと帰る事になったが、誰か着いてきたい人？」

ねえ、どうする？ 私は良いかな？ ここでダラダラしてたい

おい、誰だダラダラしたいって  
七海「よし、そうだなあ」

如月と、時雨。来てくれるか？」

如月「あら、如月をお呼び？」

時雨改二「まさか、僕が選ばれるとはね」

まあ、俺のお気に入りでしょ？

あれ？俺、今女だよな？で、向こうも女

アカン、このままだと完全に百合だ

しかし、同性（俺は精神的に）と、つて言うのもなあ

俺の精神衛生上宜しくねえな

七海「と言うわけだ、分かったな？」

『はい！』

七海「では、解散！」

よし、遠出の準備だー！

艦娘 side

睦月「皆、いい？」

提督と、如月ちゃん、時雨ちゃんは明後日の夜頃まで帰ってこない

よー！」

夕立改二「そこで、提督の帰還のパーティーをするっほい！」

吹雪改二「皆で、最高のお帰りなさいパーティーにしましょう！」

『おぉー!!』

アニメ主人公組がなにか企んでいる様ですよ？

七海 side

七海「さて、これから向かうって電報も打ったし、行くか」

如月「楽しみね〜」

時雨「うん、良い旅行もとい、無事に済むと良いね」

七海「おい、どうやったらそう間違えるんだよ

つか、本音が出てるんだよ！」

それじゃあ

三人『行つてきます！』

次の日の昼間

く日本本土はあ、着いた

七海「久しぶりに感じるな。日本本土に来るのが」

如月「へえ、なにか珍しい物が沢山ね」

明石さんとか、夕張さんとかが喜びそう

七海「妖精連中もヤバそうだな」

にしても、

七海「大本営からの迎えがかなり後だなあ」

如月「それじゃあ、提督

いいえ、七海ちゃん行きましょうか？」

七海「え？つてか七海ちゃんて」ガシッ

はい？

七海「あのく、なんで私は両腕を二人に捕まれているのでせうか？

そして、どこへいくのでせうか??」

時雨「両腕を掴んでいるのは、逃げないようにするためだよ？」

如月「そして、行き先は

洋服屋よ♪」

七海「い、イヤダアアアアアアアアアアアッ!!」

く待ち合わせ場所く

七海「もう、絶対に、服屋へ、行かないぞ」ゲツソリ

如月「なに言ってるのよくお洋服選び、楽しいでしょう♪」

七海「俺は、お前らの着せ替え人形だったがな」

時雨「にしても、提督」

と、俺の胸の辺りに目を向けて

時雨「なんでそんなに大きいのか？と言うか、女物の洋服着こなし過ぎじゃなかった？」

七海「お前、俺のトラウマを。いや、何でもない」

別に昔から女顔だったから何回か着せられたことがあるくらいで

すから

??「あ、もしかして如月さんの鎮守府の方々ですか？」

七海「ん？ああ、八百万（やおろづ）久しぶりだな」  
八百万「あ、こちらがきらぎさんですか」

七海「おい、なんだそのキラキラしてそうな名字は。

俺の名前は 如月 七海だ！」

八百万「失礼、噛みました」

七海「違う、わざとだろ」

八百万「かみまみた」

七海「わざとじゃない!？」

八百万「垣間見た」

七海「何を見たの!？」

八百万「神は居た」

七海「どんな奇跡体験をしたんだ!？」

八百万「いや、如月さんが女の子になつてる時点で奇跡体験ですよ」

七海「むう」

言い返せないな

如月「あの、提督。こちらは?」

七海「ああ、こいつは八百万 真昼（やおろづ） まひる（）と言って、

俺の後輩だ」

八百万「宜しくね！」

第十一話 大本営つてこんなに腐つてたつけ？（b  
y七海）

八百万「さて、七海さん、取り敢えず今日はこのホテルに泊まって  
いてくださいね？」

料金は大本営が出してくれるそうですよ？」

七海「へえ、珍しいな。」

如月「珍しいんですか？」

七海「彼処ケチだからな。」

時雨「へえ、そんなものなのかい？」

七海「ああ、経費をなるべく削ろうとしてくる

お金だけは有るくせに。」

如月「なんか、機嫌悪いんですか？」

七海「まあ、な」

あいつら、金とコネだけで入るんだもんなあ  
。部屋にて」

如月「提督、お風呂どうします？」

七海「ああ、行ってくれば良いじゃないか」

時雨「だからさ、提督も一緒に入るんだってば」

七海「What!？」

なにをいきなり言い出すんだ、コイツら。」

如月「だって提督、女の子の体になって初めてお風呂に入るんで  
しょ？」

だから色々教えてあげようと、思ってたね。」

七海「」

なんでそんないきなり、しかもホテルで。」

如月「それじゃあ、行きましょ」

時雨「僕も少し楽しみなんだよね」

七海「お、おい！引っ張るなって！

あー！誰か助けてー!!」

だれも助けくれませんでした。まる  
くお風呂にてく

如月「髪の毛はね、こうやって洗うのよ  
そうしないと痛むんだから」

七海「へえく」

女の子って大変だったんだな

でも面倒かも

時雨「提督ってさ、色々丁寧だよね」

七海「ん？ああ、俺の趣味がケーキとかお菓子作りだったからその  
影響かな？」

俺は、甘いものが大好きだ、なら自分で作れるようになろうか！

と、思ってから猛練習したんだよな

黒焦げにしたりして、いい思いだよ

如月「ふむ」ジイーツ

七海「？」

如月「えいつ！」モミモミ

七海「ひ、ひやあああああああ!!」

こ、こいつつつつつつつ、お、俺のむむむ胸をも、揉んで!?

如月「ふんふん、結構大きいわね。負けたわ」

何で元男の娘なのに大きいのよ!」モミモミ

七海「や、やめろ! つうか、なんでかは知らねえよ!」

つか、男の子の字が可笑しくない?

七海「はあ、疲れた」湯船にイン

時雨「あ、あはは」

なんで時雨も助けでくれないんだよ、つか完全に如月に引いてたよ  
な?

如月「ねえ、提督。おねがいがあるのだけれど」

七海「なに？」

俺は、今ちよつと怒ってますよ?

如月「命令とか、提督としてのお仕事の他の時だけでいいから、

お姉ちゃんって、呼んでくれない？」

七海「なんでだよ。」

如月「ほら、提督って一応同じ睦月型なんですよ？」

で、私の方が色々先だから、お姉ちゃんって呼んだ方がいいからね。

まあ、九割私と呼んで欲しいだけだけど。」

七海「なんだそりや。」

はあ、まあいいか。」

七海「分かったよ、お姉ちゃん」

如月「!!」ギョツ

七海「だあー、嬉しいのは分かったから抱きつくたって!!」

時雨「本当に嬉しかったんだろうね」ニコニコ

・他のやつらもお姉ちゃんって言ってみようかな。」

翌日

く大本営にてく

八百万「おはようございます、昨夜はお楽しみでしたね♪」

七海「いや、なにもしてないからね？」

できると思うか？」

七海「さて、如月と時雨はここで待っていてくれ」

如月「分かったわ」

時雨「あんまり変なことをしないでね？」

おい、それはどうゆうことだ？」

八百万「さて、七海さん。ここに元帥クラスの方々が沢山居ます

そしてその他の提督も居ると思います

七海さん、本当に気を付けてくださいね？」

七海「ああ、行ってくる」

コンコン

七海「失礼致します。如月七海、入っても宜しいでしょうか？」

元帥「入れ」

ジロシロ



へえ、良い体つきしてやがる。ほほう。これは、調教のしがい  
がありそうだな？

チツ！まだこんななのかよ？

腐っていやがる！

七海「今回は、こちらに報告と、質問、申請を致しに参りました」

元帥「よし、まずは報告から言って貰おう」

俺は、今までのことを総体等のことを伏せながら話した

なんでかって？真似しようとするアホが居るからだよ

七海「それで、質問なのですが」

いつから、現在行方が不明になっている三名が居なくなったのですか？

またその理由は？」

元帥「時期は、君たち新任の提督たちが鎮守府に着任する前日頃らしいが」

もしかすると前からも前からもしれん」

七海「そうですか」

元帥「そして、理由は不明で現在調査中だ」

七海「分かりました。また、申請ですが」

新しい提督を着任させて頂きたい」

元帥「うむ、また海軍学校から選んで着任させよう」

七海「ありがとうございます」

はあ、緊張したな」

元帥どの、貫禄というか、威圧感が凄いんだよな」

まあ、何事もなく済んで良かったな」

??「ま、待つんだな！」

七海「ああ？」

上官提督「ぼ、僕はとつても偉いんだな！だからそのからだを、触らせて貰うんだな!!」

ついでに、ぼ、僕の鎮守府に連れてってやる！」

七海「お断り致します」

上官提督「い、いいから触らせるんだな！」



第十二話 アイスクラッド流剣技？なにそれ（by 七海）

七海「はあー、あのブタ野郎今度会ったら潰す。」

脳内ピンク野郎共が多すぎて困るんだよなあ。

艦娘は娯楽の道具じゃねえっての！

八百万「お疲れ様でした、七海さん」

七海「本当だよ、なんであんなのばつかなのかが分からんね」

八百万「一応お金を出してもらってるみたいですからね。」

まあ、その内に片付けなくてはいいけませんね？」

七海「当然だ」

あんなのはO☆H A☆N A☆S H I☆しないで治らないよなあ

く埠頭にてく

七海「世話になったな、八百万」

八百万「いえいえ、また遊びに来てくださいね、止まり木さん」

七海「僕の所に鳥は止まっていない、僕の名前は如月だ！」

八百万「失礼、噛みました」

七海「違う、わざとだ。」

八百万「かみまみた」

七海「わざとじゃない!？」

八百万「狩りました」

七海「何をハンティングしたの!？」

八百万「やりました」

七海「何処の空母だよ?」

八百万「ファミマみた?」

七海「コンビニの場所を確認されても。」

つか、お前の方がこの辺詳しいだろ?」

八百万「それでは、またお会いしましょう」

七海「ああ！またな〜」

如月、時雨「お世話になりました〜!!」

〜船内にて〜

七海「いや〜、久しぶりの本土は楽しかったな〜」

如月「ホントね〜、また来たいわ〜♪」

時雨「沢山お買い物も出来たしね」

七海「ん〜、そうだ！休みの日を交代で作って本土に行けるようにしよう！

朝早くに出ればちゃんと着けるだろう」

如月「そうなたら楽しそうね♪」

〜鎮守府にて〜

七海「ん〜！やっと着いた〜!!」

如月「もうお昼過ぎちゃってるわね〜」

時雨「まあ、船の中にお昼ご飯が置いてあったから、もう良いけどね」

七海「八百万に感謝だな」（苦笑）

七海「それじゃ、荷物を置いて仕事をしないとなく」

如月「そうね」ニコニコ

時雨「そうだね〜」ニコニコ

七海「？」

その顔は、なんか企んでそうで怖いな

〜執務室にて〜

七海「はー、書類沢山あるんだろーな〜」

大淀「あ、お帰りなさい。提督」

七海「おう、ただいま」

大淀「なにか、妖精さんたちがまた作ったらしいので、見に行ってくださいですか？」

七海「またか〜」

何回やらかすんだ？ 彼処は  
もう、怖くて遊びに行きたくないよ

七海「あ、そうだ。書類は？」

多分、溜まってるでしょ？」

大淀「いえ、大丈夫です」

七海「え、でも」大淀「大丈夫ですから行ってきてください、いや行け」

七海「分かった、行ってくる」

大淀「はあ、みなさん。早く準備を進めちゃってください」

艦娘達「はい！」

「工敵にて」

七海「で？ 何を作ったの？」

やらかしてない？ どのくらい資源使ったのかな？？」

妖精「いや、我々がいつもやらかしたような言い方をしないで下さいよ」

いや、だって毎回やらかしてるんだもん

妖精「まあ、今回はですね」ゴソゴソ

と、チップとガイアメモリを取り出した

七海「ん？ まずチップから説明を頼む」

妖精「はい、提督はまだ艦娘になってから時間が経っていないですよね？」

元々艦娘は、ある程度の戦い方を身に付けたまま建造されますが、提督は少し戦闘訓練をしただけでかなり劣ります

そこで、このチップを使い艦装がアシストをするようにします  
もうデータは入っているので使えますよ？」

七海「ふうーん、ねえそのチップまだある？」

妖精「まだありますが、何に使うんですか？」

七海「ちよつと剣術を学ぼうかと思ってるね」

妖精「そうですね、それならどうぞ」

チップを手に入れた！

ゲームじゃないけど、言いたくなっただけだよ？

七海「で？このガイアメモリは？

四本あるけれど。」

妖精「それはですな。」

まあ、通称ship'sメモリとでもしましょうか。」

七海「船のメモリ？」

よくよく見るとB・D・L・Hのメモリがあった

妖精「はい、そのメモリをドライバーか、マキシマムスロットに入れるとその内容に沿った能力が付与されます

例えば、戦艦がこのDestroyerメモリをセットすると魚雷が発射出来たり、速力が上昇したりします

また、自分と同じクラスのメモリをセットすると、能力が格段に上昇します

また、適正によって選んだりしないのでどの艦娘でも使用可能です」

七海「ほう、それは面白そうだな。」

能力上昇が見込めるのも良いな。」

妖精「まだ、開発中で他の艦種のメモリや、個人の能力を付与するメモリも開発中です」

七海「そうか、なら進めてくれ」

妖精「あと、これを。」

そう言って、妖精さんが白と赤色のメモリを渡してきた

試しに白のメモリを触るとメモリが砕け

地球の本棚へのアクセス権限を入手しました！

シンクロ率 75%

という文字が思い浮かんだ

七海「これって。」

妖精「こちらもどうぞ」

恐る恐る赤色のメモリに触れると

艦隊の本棚へのアクセス権限を入手しました！

シンクロ率 80%

妖精「どうでした？」

七海「なんかアクセス権限を入手したって思い浮かんだんだが？」

妖精「はい、出来るようにしました」

七海「艦隊の本棚って必要？」

ぶっちゃけ地球の本棚だけでいい気がする

妖精「そうしたかったんですが」

なんか色々違うみたいで、地球の本棚には深海棲艦、艦娘の情報がなくてですね

え？なんでも知ってるんじゃないのか？

七海「まあ、これで見れるんだらう？」

妖精「はい、出来ますよ」

七海「そうか、ありがとう」

これからも続けてくれ」

妖精「分かりました」

〜憲兵詰所〜

七海「どうも、入りますよ」

憲兵「これは、提督殿お疲れ様です！」

七海「良いよ、そんなにかしこまらなくなっちゃって」

憲兵「そ、そうですか」

七海「でき、お願いが有るんだけど」

この中で一番剣術が上手いのってだれ？」

誰だと思う？あいつだろ？ああ、和馬だろ

和馬「お呼びでしょうか？」

七海「うん、ちょっと剣術を教えてもらおうと思ってるね

教えてくれないかな？」

和馬「分かりました、では叔父に教わった剣術、いえ剣技をお教え  
致しましょう」

七海「なんてなの？」

和馬「私は、アインクラッド流剣技と教えて頂きました」

・アインクラッドって、不味くない？

つか、アインクラッド流剣技ってなにそれ？

七海「その叔父って黒いの好き？」

和馬「はい、そうですがなにか」

あ、本人っぽいな、こりゃあ

七海「まあ、いいや

使う武器は何なんだ？」

和馬「片手で持つ武器なら何でも良いですよ」

七海「それじゃあ、これかな」

俺は詰所に置いてあった、木製の両刃の片手剣にした

和馬「良いでしょう、それではまず基本技の『バーチカル』、『スラント』、『ホリゾンタル』を覚えて頂きます」

俺達は、睦月が迎えに来るまでずっと練習をしていた



第十三話 そんな思考で大丈夫か？（by如月）

睦月「提督く皆待ってますよ〜」

七海「おう、わりい。もうそんな時間か〜」  
気づけばもう日がくれ始めていた

睦月「さあ、行きますよ〜」

七海「ちよ、ちよつと待て！」

和馬、教えてくれてありがとうな！また来るぜ！」

和馬「はい、お待ちしていますね〜」ニコニコ

〜移動中〜

七海「つたく、何なんだよ。いきなり引つ張ってよ〜」

睦月「もう、お夕飯の時間ですよ〜」

皆、提督を待ってるんですから！」

七海「ああ、悪かったな〜」

睦月「そう言えば提督」

七海「ん？なんだ？」

睦月「如月ちゃんをお姉さんって呼ぶのって本当ですか？」

え、今それを聞くの？

七海「あ、ああ。そうだったな〜」

睦月「良いなあ〜」ジーツ

七海「〜」

睦月「〜」ジーツ

はあ、しょうがないか〜

七海「分かったよ、呼べばいいんだらう？」

睦月姉さん」

睦月「うん！これからなるべくそう呼んでね！」

七海「任務とか以外の時だけな〜」

さすがに使い分けなきゃならんだらうに〜

臯月「〜」ほほう〜」ジーツ

く食堂く

睦月「さあ、どうぞく」

七海「まったく、何でもそんなに急がなくても  
パンパンパン！」

!?!、なんだ!?!

艦娘達「提督！お帰りなさい!!」

あー、そうゆうことね

七海「にしても、なんでいきなり？」

睦月「それはね、提督が帰って来てから早い方が良いし、今日より前だと忙しそうだったからだよ！」

吹雪「まあ、提督さんが居なくて準備がしやすそうだったからでもありますけどね」苦笑

夕立「それよりも！皆で提督の新しい名前を考えたんだよ！」

七海「俺の名前？なんでそんなものを」

俺にはもう如月七海という名前があるだろうに

大淀「いえ、というのもですね

提督は艦娘としても活動するようになりますよね？」

七海「ああ、まあそうだな」

大淀「なので、提督としての名前とは別に艦娘としての名前もあつた方が良いかな？と思ひまして」

七海「だからか、まあ、理屈は通る？のか？」

如月「まあ、呼びやすいし、仲良くなれそうじゃない？」

七海「ああ、そうゆうこともあるのか」

フレンドリーな方が良いもんなあ

七海「で？なんて名前なんだ？」

時雨「うん、僕が考えたんだけどね

提督の名前は

帰月だよ

ほう、帰月か

七海改め帰月「なんで帰月になったのか説明を頼む」

時雨「うん、まず提督の名字って如月だよね？」

だから、同じ2月の別の言い方である帰月にしたんだ

あと、提督は一回死にかけて帰ってきたからっていうのもあるね」

帰月「へえ、いい由来じゃないか」

ありがとな、時雨」ナデナデ

時雨「っ！」／／

帰月「す、すまん！嫌だったか!？」

時雨「い、いや。も、もうちよつと良いかな」ボソツ

帰月「？」

睦月「良いなあ」

如月「良いなあ」

全く、女の子とはよくわからないなあ

あ、俺も今は女の子だったな

そしてパーティーも終わり

くお風呂場

帰月「ふう」

全く、大本営にいくと疲れるな

あんなやつばかりだから疲れるんだよなあ

今俺は一人でお風呂に入っている

え？なんでかって？

そりや元男と一緒にお風呂に入りたく無いだろうから一人で入っ

てるんだよ

如月「帰月ちゃん、着替え置いておくわよ」

帰月「あ、すまないな」

如月「じゃあ入るわよ」

は？

帰月「はあ、いいのか？俺と入って」

如月「良いのよ、って言うか昨日も入ってるでしょ？」

帰月「そうだったな」

別に良いけどさ、元男と入っていいのかなあ

如月「でも、変なこと考えたら」

帰月「別に何にも思わねえよ？」

如月「え？」

帰月「いや、俺も今は女の子だし、まず艦娘をそんな目で見ないよ  
大本營のあのクズどもじゃないんだからさ。」

如月「いやいや、元男だよね？」

帰月「?うん」

如月「そんな思考で大丈夫か？」

帰月「大丈夫だ、問題ない」

如月「はあ。」

帰月「??? よくわかんねえな。」

そろそろ上がるかな

帰月「俺はそろそろ上がるぞ」

如月「あ、待ってて。私も上がるから」

帰月「別に入っていていいんだぞ？」

如月「だって帰月ちゃん、髪の毛の乾かしがた知らないでしょう？」

あー、そうだったな。」

帰月「良いよ、別に髪の毛乾かさなくても。」

如月「駄目よ！髪の毛は女の子の命なんだから！

あと。」

帰月「ん？なんだ？」

如月「その口調も何とかしないとね」

帰月「ええ、これは変わらないと思うぞ？」

如月「あら、なんでかしら？」

帰月「いや、この口調を無くしたら元男っていうのを忘れそうで。」

如月「あー。」

帰月「ま、努力はしてみるさ」

如月「分かったわ、けど髪の毛はちゃんと乾かしなさい！」

帰月「はいはい。」

如月「別に元男っていうのを深く考えなくても良いのに。」ボソツ

で、そのあとちゃんと乾かされましたさ

如月：総（鈍いわねえ、帰月ちゃんも。）」  
帰月（お、久しぶりに出てきたな？）  
如月：総（そっちが忙しそうだったからね。）」  
帰月（で？鈍いって何なんだよ？）  
如月：総（自分で気づいた方が良いから教えな。い）」  
帰月（はいはい、そうですか。）」  
ま、明日も頑張るかな。）」

## 第二章 発動！ B提督及び、 B鎮守府討伐作戦！

第十四話 余裕の音だ、切れ味が違いますよ。(by 妖精さん)

帰月「さーてと、この前まで使っていた艦装を片付けなきゃなあ」  
俺は今、工蔽で艦装の片付けをしている

軍刀をまた使いたいから様子を見なきゃいけないし

軍刀を使う理由は、まあ、良いかな

帰月「あゝあ、ボロボロになっちまって

これじゃ使えねえな

さて、軍刀は無事かな？」

柄を鞘から抜くと、そこには煤で黒くなり、ヒビが入っているものの  
使えそうな軍刀が合った

帰月「お、こいつは明石に見てもらえばまだ使えそうかな」

??「テイトクッ!!」 帰月に飛び付く!

帰月「え、何々!?

ゴフア!」

パキン!

帰月「金剛・前から言ってるよね？」

急に飛び付く。これで何回目なの？」

金剛「oh、スママセーン。提督

で、何してたんデスか？」

帰月「ん、軍刀を使いたいたいからどんなもんかと

あれ？刀身が、ない!?!」

見るとほぼ根本から折れている刀が

帰月「金剛おっ」

金剛「あ、アワワワ」

帰月「と、言う訳なんだが

直せそうか？」

妖精「んー、こりや駄目だ。

打ち直した方が早いですよ」

帰月「だろうなあ。」

なんなんだ、金剛は。」

飛び付くだけで刀へし折るとか。人じゃねえだろ。

あ、艦娘か。」

妖精「打ち直しはしますが。提督さん」

帰月「あん？」

妖精「何故近代兵器が深海棲艦に効かず、艦娘や近接武器などしか

効果が無いか。」

ご存知ですか？」

そう言えば。」

公式でも、近代兵器は効かないとかあったような気がするが。」

帰月「分からん。何故なんだ？」

妖精「理由はですね、魂がこもって無いからなんですよ」

帰月「魂って、あの？」

そう聞くと妖精さんは頷き

妖精「深海棲艦は怨みや憎しみ等、強い負の魂が第二次世界大戦時の元艦に乗り移った物です。」

一方、艦娘は、何かを守りたい等の善の魂からなります

そして、艦娘の攻撃は負の魂を自分の魂によって揺るがし攻撃を与

えるのです

深海棲艦もこれは同じです

そして、ドロップと呼ばれるものは負の魂を完全に振り払うと

艦娘としての姿を得る事が出来ます。

で、近代兵器が効かない理由ですが、

深海棲艦や、艦娘には特殊な防壁があり魂が揺るがないと攻撃が通用しないのです。

近代兵器には、魂。まあ想いが無いため

深海棲艦の防壁を崩す事が出来ず効果があまり無いのですよ

勿論、全て殺しきることは出来ないようですが、小破にするのに戦略核位は必要でしょうね」

帰月「なるほど、でもなんで近接武器は効くんだ？」

妖精「簡単に言いますと、使い手の魂が伝わるから、ですね

後、元人間の艦娘が適性を持つている理由は大半が想いを伝える力が高いからです」

想い、ねえ

帰月「で、なんでそんな話になるんだ？」

妖精「こうゆうものって、魂が宿りやすいんですね。

で、魂が宿っていれば攻撃が入り易いので提督が打つてみたらどうかなあ」と

帰月「成る程ね。いいぞ、その代わり最高の刀にしたい。手伝って貰うぞ」

妖精「ええ、分かっていますよ」

帰月「やり方わかんのか？」

妖精「勿論です、プロですから」

なんか聞いたこともるぞ、そのセリフ

帰月「あ、なら使いたい素材があるんだけど」

俺はやろうと思ってる事を話した

妖精「なるほど、分かりました、やりましょう」

それから三日後

帰月「や、やっとできたあ」

妖精「ま、まさか三日間打ちっぱなしとは」

流石にあんなのもうやりたくないなあ

妖精「でも、いいんですか？」

あれ、元々は提督の艦装でしょうに

帰月「良いんだよ、もう使えないからああした方があいつらも喜ぶだろう」

で、使った素材は、もうボロボロになった艦装達だった  
また、働いてくれよな



妖精「で、銘はどうします?」

帰月「詠月(よみつぎ)にしよう」

妖精「了解です!」

名前の由来?

なんかぱつと出てきたから使った、以上

そして、月の光のような綺麗な刀、『詠月』が完成した

帰月「おお、振りやすい」

妖精「そりゃあ、提督が作りましたからね」

帰月「それじゃ、少し試し切りを」

丁度近くに有った木材を斬ってみたら、

見事に真つ二つになった

妖精「余裕の音だ、切れ味が違いますよ」ドヤア

帰月「そうだな」

ネタ使いすぎじゃね?

ドタドタ

如月「提督!三日間も何してたの!?

皆心配したんだからね!」

帰月「ああ、すまん。つい熱中してしまっ

て、心配させないでよ」

提督。お風呂は入ってた?」

あ?」

如月「入って、無いのね」

帰月「は、はい」

如月「お風呂に行くわよ!

部屋に戻って四十秒で支度しなさい!」

最近の如月はこええや

帰月「え?そろそろ新任の提督が着任するって?」

大淀「はい、先程連絡がありました」

帰月「そうか」

指揮する側から、指揮される側になるんだなあ



## 第十五話 止めろ (by 帰月)

帰月「おーい、準備できたー?」

大淀「はい、大体終わりました」

夕立「こつちも、お掃除終わつたつぽい!」

帰月「ご苦労様、それじゃそろそろ時間だから迎えにいくか!」

艦娘達「はーい!」

今日は、俺の後任となる、新たな提督が着任する日

一体どんな人物なのか、気になるな

帰月「お、あれじゃないか?」

加賀「そうみたいね、大丈夫かしら?」

帰月「なにがだ?」

つか、何気に戦力が充実してるんだよな、ここの鎮守府

あれか? 如月達がやらかしたのが原因か?

もとはといえば、俺にも責任があるが

加賀「ちゃんとした指揮が執れるか、休み等の事は取ってくれるの

かどうか、よ

その点、貴女はしっかりしていたようだけど」

帰月「よせよ、そこまでできた人間じゃねえよ」

流石に、休みは取らせたり、買い物に行かせようとしたりとかした

が他にもやっているだろう

(そんなことはあまりやら無いことが多いですby 作者)

加賀「貴方の指揮の元で、一緒に作戦をしたかったわね」

帰月「そういつてもらえるとやりがいがあるよ」

さて、接岸したようだし、迎えにいけますか

く港にてく

帰月「ようこそ、我が鎮守府へ!

貴方が私達の提督ですか?」

あ? 何でこの口調かつて?

信頼できる奴かどうかわかるまで元男ってことは話さない事にし

たんだよな

見ろよ、違和感有りすぎて如月とか笑ってんぞ

?? 「ジーツ

帰月「な、なんでしようか」

?? 「こんな子、艦これに居たっけな？」

帰月「ツ!？」

こいつ、転生者か!？」

?? 「ああ、ごめんごめん」ナデナデ

帰月「ッ!？」

なんなんでこいついきなり頭撫でてきて、しかも笑いかけるんだ!？」

あれか!？ニコポとナデポか!？流石に気持ち悪いぞ！

なんか、チャラそうな見た目してやがるし、ラノベの主人公でもめ

ざしてんのか？

帰月「あ、あの。お名前を伺っても宜しいでしょうか」

?? 「ん、ああ。俺の名前は只野 架歌司（ただのかかし）だ、皆

よろしく!」ニコツ

・ おえ。本当にやめてほしいんだが

顔は悪くないどころかイケメンの部類に入るんだけど、性格が最悪

だな

・ おい、やめろおまえら

一応上司になるんだから、その目で睨むなよ

只野「さて、あんないしてくれる?」

帰月「は、はい」

なーんか、信用ならないなー

実は、妖精さんに極秘でつくってもらってあるものが有るんだけど

ど、気付かれないようにせねば

そのあと一応、無事に案内は終わった

勿論、普通の鎮守府としてのただけだけ

くその夜

如月「全く、なんなのかしら!あの提督は!？」

帰月「まあ、落ち着けて。案外しつかりとやってくれるかもしれないぞ？」

如月「そんなわけ無いでしょう。」

睦月「私もそう思うにやしい！」

いきなり、姉達に全否定されると少し精神的にキツイんだが、理由を聞くと

如月「だって、いきなり頭を撫でてくるひとなんて普通いる!？」

そんなこと、帰月ちゃんしなかったじゃない？」

帰月「まあ、そうだな。」

睦月「後は、勘かな？」

帰月「オイオイ、そんなんで大丈夫か？」

睦月「大丈夫にや、問題にやいにやしい！」

だといけどな。」

帰月「取り敢えずは、信用せずに様子を見るでOK？」

如月「分かったわ」

帰月「じゃ、俺は寝るわ。お休み」

如月・睦月「お休みなさい」

因みに、俺は一人部屋で提督時代の名残が残っている

ふあ、ねむ。」

只野「遂に、寝るようだな？」

一目見て、可愛いなと思っただよ!

後、胸もかなりの大きさだしな!

つと、いけねえ。アイツに教えてもらったこの技術なら

フハハ、楽しい夜戦になりそうだな

深夜

帰月「ん、んん」

なんか寝苦しい、そう思って目を開けるとそこにはあまり見たくな

いやつの姿が

只野「ハア、ハア可愛いな」

帰月「なっ!?!」

こいつ・一体何を!?

只野「いやー、帰月ちゃん可愛いからさ、つい来ちゃった」

帰月「あ、ああっ、あああ!?!」

な、何がついだよ!?

つか、あ、頭可笑しいんじゃないか!?

提督だからと言って襲い掛かっていいわけ、な、ないだろ!?

只野「さあ、俺に全てを任せるんだ」

そうすれば、きつと楽しいことが出来るよ。フッフ、楽しみだなあ

!」

帰月「い、嫌だ、やめろ」

・止めろ・やめてくれ!

俺は・元男なんだ・そんなの気持ち悪いだけだ

只野「えい、脱がしちやえ!」

帰月「き、キヤアアアアア!?!」

や、やめて・もう、止めてよ

何がしたいんだよ・お前なんて気持ち悪いだけなんだよ

只野「さあ、俺と一夜を過ごせばきつと、俺の虜になるさ!」

帰月「あ、ああ、止めろ、来るな!」

只野「んー? つれないなあ」

まあ、良いやそんな気持ちも忘れるよ

だ、誰か来てくれッ!!

如月「提督!?! 一体なにをしているんですか!?!」

只野「き、如月!?! い、いや、これは訳があつて」

如月「帰月ちゃんの叫び声が聞こえましたよ?」

それに、ここは帰月ちゃんの部屋です。なぜ貴方がここにいるんで

すかね?」

只野「そ、それは・間違えてしまつて」

如月「チツ!」

帰月「き、さらぎか、?」

如月「帰月ちゃん! 大丈夫!?!」

帰月「あ、俺、何が

あ、ああ!? 来るな!! どっかいけ!

如月「!? 帰月ちゃん!?

私よ! 如月よ!! どうしたの!? しっかりして!

不味いわね、フラツシユバックしてる

相当シヨックだったんでしょね

しかも、元同性にいきなり襲いかかれて、恐怖心が芽生えても可

笑しくないわね

只野め・もつと早く対策するべきだったか!?

如月「帰月ちゃん、もう大丈夫よ

泣いても良いわ、安心してね

帰月「う、うう

うわーーーーーん!!!

怖かったよ! 気持ち悪かったよ! 怖いよー!」

た  
そこには、泣き崩れる帰月と、それを抱いて撫でる如月の姿があつ

第十六話 これは、ゲームではないし遊びでもない  
(by 帰月)

如月「どう？落ち着いた？」

帰月「ああ」

しばらく泣き続けていた俺は、そんな声に顔を上げた

如月「全く、私達の可愛い帰月ちゃんを襲おうとして、本当に消してやろうかしら」ブツブツ

帰月「お、おい？」

もとい、物騒な言葉が聞こえたので顔を上げた  
いや、消すってお前なあ

せめて憲兵に引き渡すくらいにしとけよ  
どうなるかは知らんがね？

如月「いやよ、そんなの生ぬるいわ。

徹底的に懲らしめないと」

帰月「さらつと心を読むのやめてもらえるかな？」

如月「あら、ごめんなさいね」

なんで心を読むんですかね？

如月「愛のなせる技よ」

帰月「そうですか」

睦月「帰月ちゃん、大丈夫!？」

帰月「あ、ああ。大丈夫、かな？」

睦月「なんで疑問系なの!？」

帰月「ははは、冗談だよ」

睦月「もう！それで、どんなことがあったの？」

帰月「あ、それはだな」

少女説明中

睦月「許せない！そんな人追い出しちゃおう！」

帰月「お、おう」



なんでこんなに好戦的なの？  
皆ストレス溜まつてる？何とかしないとなあ

このあと、クソ提督（ツンデレではない）に内緒で全艦娘に説明と  
注意を呼び掛けた

く工蔽にてく

コンコン

帰月「妖精さん、起きてます？」

妖精「起きてますよ。どうかしましたか？」

帰月「実は」

妖精「そんなことが」

帰月「だから、あれの完成を急いでもらいたいんですが、  
出来ませるか？」

妖精「愚問ですね。出来ますよ」

帰月「後、資材を貯蔵しておいてください」

妖精「了解です」

帰月「ありがとうございます！」

では、また」

パタン

妖精「やれやれ、軍のお偉いさんはまだあなのかねえ  
だから、先の大戦にも負けるというのに」

く自室にてく

今度は、嚴重に鍵をしてベッドに横たわった  
帰月「はあ、明日からは準備をしないとなあ」

そして、目を閉じようとした瞬間に

あのクソ提督の顔がフラッシュバックした

帰月「くっ!？」

怖い、体が動かない、体が震える

いや、まて！これは幻覚だ、本物じゃない！

そう思っても、震えは止まらなかった

その時、部屋のドアがノックされた

帰月「え？」

ドアを開けるとそこには如月が立っていた

帰月「どうしたんだよ、早く寝ろよ？」

如月「いやいや、帰月ちゃん凄い顔してるわよ？」

帰月「まじか？」

そんなに分かりやすいか、俺

如月「どうせ、寝られないんでしよう？」

だから、皆で一緒に寝ない？って言いに来たの」

帰月「え？一緒に？」

それはそれで不味い気がするんだけど

如月「良いのよ、お泊まり会みたいなものって思えば」

帰月「いいの、かなあ」

まあ、本人が言ってるんだし

帰月「で？どこで寝るの？」

如月「私たちの部屋よ？」

はい？

一応説明すると、基本的に同じ型の艦娘と同じ部屋なのだ

例外は、島風とか一人しか居ない型のやつが部屋に入れてもらった  
り人数が多い型のやつが別の部屋になったりする

で、睦月型はまあまあ人数は居るが、卯月、水無月、長月、菊月が  
居ないので、一部屋になっている

その中にいけど？

如月「皆良いつて言ってるから大丈夫よ！」

いやいや、俺の精神がもたねえ

如月「さあ、行くわよー」グイグイ

帰月「いや、ちよつと強引すぎやしねえか!？」

く睦月型の部屋にてく

如月「着いたわよ。ここが私達の部屋よ！」

帰月「うん、知ってる」

そりや、元提督ですし？

如月「入って、入って」

帰月「お邪魔します」

睦月「ようこそ、私達の部屋に！」

帰月「お、おう」

なんか、やりづらいな

と、なんか弥生がジーツツと見てきているんだけど？

帰月「弥生、俺来ちや駄目だったかな？」

弥生「なんでですか」

帰月「いや、なんか怒ってそうだから」

弥生「怒ってなんかないですよ」

帰月「そ、そうか」

悪かったな、そんなこと言つて」

弥生「あ、大丈夫、です」

大人しいなあ。他の連中も見習ってほしいよ

えーつと、もつちはゲームしてて、皐月とふみいはもう寝てる

早いな

んで、三日月は本読んでるな。うん、あれだな

帰月「睦月型って個性豊かだな」

如月「いや、帰月ちゃんだって一応睦月型でしょ？」

帰月「そうだったな」？

俺、そんなにキャラ濃いかな

で、寝る時間になったんだけど

なんで俺のとなりで寝る人を決めるだけで時間がかかるんだ？

結局、如月ともつちーが隣になったんだけど

俺と如月以外寝ちまった

帰月「あつという間に寝たな」

如月「そうね、で帰月ちゃんはいつ寝るの？」

帰月「俺は、寝ないつもりだが？」

また思い出しても嫌だしな」

如月「そう・じゃあ、寝るとき手を握ってて？」

帰月「あ？良いけど？」

そういつて俺は如月の手を握った

如月「フフツ、じゃあおやすみなさい」

帰月「ああ、おやすみ」

そんなこんなで、皆寝たんだけど

皆穏やかな寝顔してやがるぜ

そうだよな、戦いは続いているけどやつと安らかになりつつあるんだ

それを人間の勝手な思いで壊させては駄目なんだよな

これは、ゲームじゃないし、遊びでもないんだ

もう、ゲームは終わったんだ

それをわかってない奴はしつかり思い知らせないと、ね

そんなことを考えていたら眠くなってきた

試しに目を閉じてもフラッシュバックはしなかった

そして、いつの間にか寝てしまっていた

## 第十七話 そうだ、引越しよう（by 帰月）

帰月「うくん、これはいよいよ不味いかなあ。」

加賀「そうですね、ここまで酷いと大本営が心配になってきます」

帰月「そうだな。」

何をぼやいているのかと言うと、

実は赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴など、空母組に手伝いを

頼んでいたのだ

その内容は、提督の空からの監視

案の定、艦娘に過度なスキンシップをとったり、嫌がってるのにも

関わらず触ろうとする等々。

更に、資源の横流しや不法に艦娘を購入しようとしていた

まあ、買えなかったらしいのだが。

勿論、艦娘や妖精さんたちからの不満は高まってきた

さてさて、どうするべきかなあ。

加賀「提督、もうあれを稼働させてはいかがでしょう?」

帰月「はあ、こんなことをするために作ったんじゃないけど。」

あつちがその気ならやるしかないよね?

帰月「よし、加賀。仕事だ、全員に必要なものだけを準備するよう

に伝えろ」

加賀「加賀、了解致しました?」

よし、戦争の始まりだぜえ。」

深夜

帰月「よし、皆いるか?」

グラウンドに集まったのは、ここの鎮守府に居る、全艦娘たち

で、なにをやるかと言うと。

帰月「これより、鎮守府から、緊急用の指揮所に移動する!

勿論、設備はほぼ同じだから安心しろ!」

簡単に言うのと、引越である。」

勿論、ここを引き渡す訳がなく。」

後、理由はこれ以上うちの子達に悪さを働かせたく無いからだ  
で、細工もきつちりしておきます

↳第二指揮所↳

帰月「よし、着いたな

みんなー、お疲れ様！もう寝て良いぞ！ちゃんと部屋に名前が書いてあるから見ろよー！」

ここは、鎮守府がある島から少し離れたところにある、農業用の島  
その農機具小屋の床に入り口がある第二指揮所だ

ちやんと、工蔽、出撃場、入渠ドツグ等がある

まあ、緊急用だからそんなに知られた場所には無いんだけどね  
眠い・けど、もう一仕事あるんだよな・

鎮守府の方は妖精さんに任せただから、こっちは・

援軍でも呼ぶか、アイツも呼んでこっちを探してきそうだしな

帰月「もしもーし、八百万？久しぶりかな？」

八百万「本当ですよ！で、なんでこんな時間に電話を？」

帰月「実はな・・・」

少女、説明中・・・

八百万「また、ですか・・・」

帰月「おう、まただ・・・」

八百万「分かりました、必要なメンバーは、此方で選びますが  
必要なメンバーは居ますか？」

帰月「居る居る？和馬に聞いたんだけど、あの人って居る？」

八百万「あの人・ああ、居ますよ。その人ですね、了解です！」

帰月「何日後かは、すぐ連絡する」

八百万「わっかりましたー！それでは、その時に」

帰月「うん、じゃあな」

プツツ

よしよし、後は只野の動き次第だ

↳翌日、鎮守府にて↳

只野 side

只野「んー、今日もいい天気だな」  
さして、食堂に向かうか

只野「あれ？誰とも会わないな」  
まだ皆寝てるのかな

別に全然構わないけどね！

出撃なんてもつての他だよ！

只野「で、誰も居ないと」

・とりあえず、執務室に行くか

只野「あれ？なんだこれ、紙？」

なんか書いてあるので読んでみた

・んー、これは

只野「きつと、皆困ってるよね！大丈夫だ、皆僕の素晴らしさをわ  
かってくれるはず！」

その時に一緒になって証明してくれる艦娘の子が必要だね  
建造しよう！

只野「あれえ、何でだ」

提督権限でロックされています、って

僕が提督なのになんでだよ!？」

やっぱり、使えないなあ

だから妖精はキライだ

ちつまあいい、あの先輩から憲兵を借りてくるとするか

只野「はい、はい、三日後ですね、分かりました、よろしくお願  
いします」

カチャン

ふう、取り敢えず、三日後に艦娘の子達を探し始めるとしますか

く第二指揮所く

バカか、全部丸ぎこえだつっの！

実は、昨日妖精さんたちに盗聴器を仕掛けてもらっておいた

理由は、なにをするのか探るため、で案の定憲兵の援軍を呼んでい  
る様だが。

帰月「三日後か。」

大淀「いよいよですね。」

帰月「ああ、艦娘にはなるべく参加させないがな」

大淀「何でですか？」

俺は、目を伏せて

帰月「これは、人間達のいざこざだ、俺も元人間としてかたをつけ  
なきやいけない、

それに、汚れ仕事をさせたくないんだ。

もしかしたら、殺してしまうかもしれないのだから。」

大淀「提督。」

帰月「ダメだな、こんなんじや、威厳を持たなくては。」

大淀「フフ、その姿のせいで威厳なんでゼロですよ」

帰月「なんだとー！」

取り敢えず、和馬にアインクラッド流剣術を教えてくださいな。



## 第十八話 その装備は大丈夫か？（by 帰月）

帰月「と、言うわけで、三日後の早朝に着くようにしてくれ。ルートは、送った通りだ」

八百万「わつかりましたー、でもいいんですか？」

帰月「ん？何がだ？」

八百万「だって、艦娘は基本的に人間に攻撃出来ないんですよ？

帰月さん戦えるんですか？」

帰月「んー、うちの鎮守府の艦娘は戦闘に出さないつもりだし」

八百万「まあ、帰月さんならそう言いそうですけど」

帰月「あと、俺何かさ提督としての側面も持ってるらしくて」

一応人間に攻撃は出来るっぽいんだよね」

さつき和馬とかに試してみたし、妖精さんも言ってるから間違い無い！

八百万「へー・便利ですねえ」

帰月「おいおい・こうなるまでが大変だったんだぞ」

死にかけて・いや、死んだのは、まだいい

自分でやったことだしな

でも！なんでそのあと艦娘に可愛いとか着せ替え人形みたいにさ  
れなきやならんのだ！

俺一応上官つてことになってるハズなんだけどなあ…

八百万「まあ、また三日後にお会いしましょう！」

帰月「ああ、頼んだぞ」

ツイッター

ふう、終わった

さて、何をするかね

金剛達とお茶会をするのもいいし

あ、妖精さんの謎技術によって窓の外は完璧に外の景色と同じに  
なっている

あれだ、借り○しの○リエツテイみたいな感じ

そーすると・なんか持ってかなきやダメだよな

よし、妖精さんに運んでもらったお陰で冷蔵庫や倉庫の中に一杯い  
ろんなものが入っているから何か作るかね

くキッチンにてく

うくん、なにを作るか悩ましいな

お茶にあつて尚且つ楽に作れるもの

そうだ、ドーナツでも作ろうか

帰月「く♪」

久しぶりにドーナツなんて作ったけどやっぱり楽しいな

そんな風にドーナツの生地を混ぜていると

文月「司令官、何してるの？」

帰月「お、文月か。どうだ？調子は」

文月「うん！とってもいいよー」

帰月「そうかそうか」

この間、文月を改二にする方法が分かったらしくて早速改造してみ

た

何か可愛くなったよね！（個人の感想です）

元々可愛いしふれ合いやすいね！

いやー、改造して良かった（これは、個人の（ry）

文月「で？なに作ってるの？」

帰月「ああ、ドーナツでも作ろうかと思ってな」

文月「丸くするの？」

帰月「と、思うじゃん？」

フフ、俺にはこれがあるのだー！

文月「なにこれ？」

帰月「これはな、ドーナツのお店で使うやつだ」

文月「なんでここにがあるの？」

帰月「間宮さんが貸してくれた」

文月「へー、面白そう！」

帰月「そうだなー、でもこれ意外と難しくてさ…」

綺麗なあの形にならないんだよ…

取り敢えず：

この道具の中に生地を入れて、道具の口を油に近づけて  
上手い具合に揚げたりすると

帰月「ほい、ドーナツの完成」

文月「うわー！すごい！」

帰月「それ、食べていいぞ」

文月「やったー！」ハムハム

帰月「どうだ？」

文月「美味しい！」

そりゃ、良かったよ

一応ドーナツの店でバイトしてたし：

なんかちっちゃい金髪の子が高校生と買いに来てたりしたしな

金髪って：あれ染めて無いのかな？

赤城「何だかいいにおいがあります：」

加賀「本当ね：なにかしら？」

帰月「げっ：」

やっべえ、うちの大吃いコンビが来やがった

あんまりこういった事はしないほうが良いのかね

結局、俺はドーナツが食べれませんでした

何で皆集まってくるんや：

く工蔽にてく

帰月「はい、これ差し入れだよ」

妖精「ありがとうございます。うわ、美味しそう」

帰月「皆で食べてくれ：

ところで、頼んだ物はできましたかね？」

妖精「もちろんです、プロですから

えーと、フラッシュバンが30個ゴム弾、麻酔弾が500発ずつで

すかね」

帰月「ありがとう、助かるよ」

妖精「提督の為ですから」ニッコリ

響「やあ、提督。なにしてるんだい？」

帰月「お、響か。今度の準備をしようと思ってるな」

因みにヴェールヌイになっているが、響と呼んでくれって言われてるからそう呼んでる

響「そう言えば提督、これなんだい？」へカート2

帰月「ん？スナイパーライフルだよ、正確には対物ライフルだがな」

響「ふーん、撃っていいかい？」

帰月「試射場に行ってくれよ？」

響「分かってるって」

くしばらくして

響「これいいね、もらっていい？」

帰月「お、おう…響」

響「なんだい？」

帰月「その装備は大丈夫か？」

響「大丈夫だよ、問題なんて無いさ」

帰月「そうか…大事に使ってくれ」

響「分かってるよ」

どうやらうちの響はスナイパーになってしまったようです

## 第十九話 艦隊冬の大建造祭り!

帰月「そうだ、建造をしよう」

如月「急に何を言い出すのかしら?」

そう言えば今日は如月が秘書艦なのか

帰月「いやね、今度の作戦の時に指令を出してくれる人が必要なんだよな…」

如月「大淀さんが居るじゃない」

帰月「いやー、人が凄く増えるから大変そうだしね…」

それに、他にも理由はあつて、単純に戦力が欲しいのと…」

如月「欲しいのと?」

帰月「キヤラ増えた方が話が進みやすいかなーって」

如月「メタいこと言わないでよ」

帰月「そんなー(ー|ー;)」

帰月「つてな訳で、よろしく」

明石「人使い荒くありませんかねえ!」

帰月「知らんな」目そらし

明石「ソナー」シヨボン

帰月「まあまあ…この一件が終わったら休みもあげるし東京にも行かせるから…」

明石「本当ですね!」

帰月「お、おう」

明石「それで、どの建造をします?」

帰月「大型を一回と普通のを二回かなあ」

明石「了解です。後、妖精さんたちが呼んでましたよ?」

帰月「ええ…?」

またか?またやらかしたのか!?

妖精「遅かったですねえ、待ちくたびれましたよ」

帰月「忍野みたいなこと言うのやめて？」

物語シ○ーズの要素は少ししか無いんだからさ！

帰月「つーか、この設計図なに？」

妖精「え？ミレミアム・ファ 帰月「うん、もうわかった」

それは強制力が働くからNG

「ハハッ！」

帰月「!？」

もういるじゃないですかーやだー

まあ冗談だが（前書きにもうあるし…）

帰月「んで？なんのご用ですか？」

妖精「はいこれ」

帰月「ん？銃？」

妖精「ブラスターといってですね…」

帰月「妖精さんスターウ○ーズ好きだろ？」

妖精「はい、そうですが？」

帰月「ええ…（困惑）」

妖精「で、これの特徴は人間をなるべくダメージを与えずに気絶させるんです」

帰月「へえ…で？試してみたわけ？」

妖精「はい、憲兵さんに協力してもらいました」

帰月「憲兵さーん！」

何してるんだよ…

しかし、これは使えそうだな…

帰月「これを使えってことか？」

妖精「そうです、これから来る方々の分も作る予定です。」

帰月「そうか」

明石「妖精さん、工蔽で何かしましたか？」

妖精「あー、少し改良を…」

明石「何故か調子が悪かったですけど…？」

煙が出てきたり、謎の振動があったり…」ピキピキ

妖精「そりやあ…他の人達がやらかしましたから…」

帰月「え、なにそれ怖い」

チーン

帰月「ん？電子レンジ？」

明石「あー、出来上がりましたかね。全部」

帰月「早いな」

まるゆだったりしたらやだなあ…

現実でやらかしたこともあるからますます…

明石「じゃ、開けてみますねー」

誰が来るかな…？

んん？なんかよくわかんねえけど威圧感が…

三笠「我は三笠だ、東郷殿と一緒に戦ったこともある、よろしく頼むぞ」

雪見「私は雪見、まあよろしく頼むわ」

霰「は、はじめまして。霰でしゅ…」

……………どうしてこうなった!?